黒き英雄

玄野　洸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き英雄

【Ｎコード】

Ｎ２１７３Ｕ

【作者名】

玄野　洸

【あらすじ】

世界最大規模のＶＲＭＭＯ（フルガイア・オンライン）――――　そこで俺は最後の転生を行っていた。

そしてそれが終わった後、俺を待っていたのは――――――異世界だった。……「ハァ！？」

調子こいた中三が初めて小説書きました。文章構成とかがむちゃくちゃだと思いますが、良かったら暇つぶしにでも読んでください。

キャラクター紹介　※ネタバレアリ（前書き）

まず最初に、ホントすいません！

次話を待ってくれていた方もいたかもしれませんが、
ユーリ達のステータスがようやく出せたので、
ついでにキャラクター紹介もしたいと思います。

キャラクター紹介　※ネタバレアリ

◎主人公

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ３２

体力：１０７
筋力：１０７
魔力：４１
精神：４１
敏捷：２４９
器用さ：８１
運：８１

ＳＰ残量〈１１０〉

称号：魔剣との契約者

スキル：魔剣技【速連撃型】、魔剣技上昇、瞬間加速、加速上昇

職業：魔剣士

装備：黒色のレザーコート

５０７８００Ｇｉｌｌ

本作の主人公。ＶＲＭＭＯ〈フルガイア・オンライン〉をプレイしていたら、そこと似た世界〈フィルガイア〉に転生した不幸な（？）高校二年生。
容姿は、黒髪黒眼の典型的な日本人顔。体は細身で、身長は１７８？。本人曰く、『この見た目なら中の下か、せいぜい中の中だろう』とのこと。だがそれは本人が言っているだけで、世間一般で見れば、『中の上か、上の下は普通にある』くらいの評価。本人は自分の容姿のレベルを良く分かっていないっぽい。

◎主人公の魔剣

〈フィレストール〉

契約を結んだ主人公を『マスター』と呼び、行動を共にしている。
２００年前、次々と契約を迫る輩にいい加減うんざりし始めたので、もといた場所より程遠い、アカリナの町の外れの森に結界を張り、そこで日々を過ごしていた。最初の方は外の世界も簡単な魔法で見ていたが、あまりにも変化が少ないのですぐに飽き、１００年くらいで見るのをやめた。
身長は１５０？くらい、それなりに出るとこでてる。肩くらいまで伸ばしたまっすぐな銀髪。少し垂れ目気味の蒼い瞳を持つ美少女。基本的にメイド服を着ている（バリエーションは特にないらしい）。

◎アカリナのギルドの空間魔法士

〈シュドミナ〉

アカリナのギルドの専属空間魔法士。

良く転送魔法のミスをするが、小さいミスなのでギルドを解雇されないでいる（結構リストラの危機）。ポーチやピアスといった空間魔法を使った道具の質だけは一級品。
ローブを着ていて、杖を持ったいかにも魔法使いルックの、金髪メガネのなよっとした感じの男。

※ちなみに、無属性魔法（空間魔法や時間魔法など）を専門的に扱う者を魔法士という（だからと言って普通の魔術が使えないわけでもない）。

◎〈イーズ・ブリーズ〉所属の治療術師

〈ユーリ・クライノ〉

１５歳　　Ｌｖ４１

体力：２３
筋力：２３
魔力：１２８
精神：１０３
敏捷：４１
器用さ：４１
運：４１

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：魔技【支援型】【光術型】、支援技上昇、回復技上昇、詠唱短縮

職業：治療術師

装備：神聖なローブ、加護を受けた杖

５８６８０Ｇｉｌｌ

格上のボスに襲われていた時に、主人公助けられた。そこで主人公に惹かれたらしい。

最近実力を上げてきている期待のパーティー〈イーズ・ブリーズ〉所属の治療術師。主に回復や支援を担当。両親は宿を経営しているらしい。

身長は１６５位？くらい。腰のあたりまでまっすぐに伸ばした艶やかな黒髪に、オパール色の瞳。出るとこが出てる美少女。

◎〈イーズ・ブリーズ〉所属の騎士

〈アインス・ローリエ・シェルキナ〉

１５歳　　Ｌｖ４２

体力：１５４
筋力：１２６
魔力：２２
精神：２２

敏捷：３０
器用さ：２８
運：２８

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：剣技【重撃型】、盾技【重撃型】、盾技上昇、守護範囲増加

職業：騎士

装備：鋼鉄のブレスプレート・一式、鋼鉄の剣、鋼鉄の盾

６３２８０Ｇｉｌｌ

アイナの双子の兄で貴族出身。ユーリに好意を寄せていて、十分に強くなったら思いを告げようかと思っていたが、主人公が現れて何もする前に撃沈。最近までライバル関係だったラルゴとも愚痴を言い合う仲になっている。〈イーズ・ブリーズ〉では、敵を引き付け、攻撃を受け止める役を担当。
身長は１７０？くらい。短くそろえた明るい茶色の髪に、碧眼にがっちりとした体。見る人によって『上の下』と『上の中』を行ったり来たりする美少年。

◎〈イーズ・ブリーズ〉所属の魔術師

〈アイナ・ローレル・シェルキナ〉

１５歳　　Ｌｖ４２

体力：２１
筋力：１７
魔力：１５４
精神：１０９
敏捷：３２
器用さ：３６
運：４１
ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：魔技【氷術型】【雷術型】【炎術型】、魔技上昇、氷魔術上昇、詠唱短縮

職業：魔術師

装備：魔なるローブ、祝福を受けた杖

５７２１０Ｇｉｌｌ

アインスの双子の妹で貴族出身。本当のリーダーはアインスだが、実際はパーティー〈イーズ・ブリーズ〉の舵を握っている人。氷、雷、炎の属性の魔術が使える（この三属性は一般的）。特に氷の魔

術を得意とする。〈イーズ・ブリーズ〉では、アインスがおびき寄せた魔物を殲滅する担当。
身長は１５０?くらい。アインスと同じ明るい茶色の髪を肩まで伸ばしていて、碧眼。小柄な体型。こっちはお世辞にも出てるとは言えない美少女。

◎〈イーズ・ブリーズ〉所属の拳闘士

〈ラルゴ・バサンダ〉

１５歳　　Ｌｖ４１

体力：６４
筋力：６４
魔力：２０
精神：２０
敏捷：１２４
器用さ：７６
運：３２

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：拳技【連撃型】、脚技【連撃型】、拳技上昇、脚技上昇

職業：拳闘士

装備：灰狼の革鎧、灰狼の鉄爪

６６９３０Ｇｉｌｌ

田舎の方の農村出身。家族の期待を一身に背負っていて、プレッシャー感じている。アインスと同じくユーリに好意を寄せていたが、思いを告げることなく撃沈。最近までライバル関係だったアインスとも愚痴を言い合う仲になっている。〈イーズ・ブリーズ〉では、回復役（ユーリ）によってきた魔物の殲滅。可能であればアインスに集まった魔物も殲滅する担当。

身長は１６８？くらい。手入れをしていない様なくすんだ金髪に、こちらも少しくすんだ碧眼（少し目つきがキツイ）。ほっそりとしながら引き締まった体。こちらも『上の下』くらいの容姿をした美少年だが、目つきや髪のせいで『中の上』……にいけるか？　くらいの感じ。

◎ラナバスタのギルドマスター

〈グイル・ガーラナ〉

王都・ラナバスタのギルドマスター。主人公のタメ口にも特に注意する様子もない心の広い（？）大人。

身長は１８０？くらい。健康的に日焼けした肌に眼鏡をかけた『伊達男』といった感じの男で、たぶん歳は４０代。

キャラクター紹介　※ネタバレアリ（後書き）

どうでしたでしょうか？

……書いてみて改めて思いましたが、ホントご都合主義ですね。コレ。

自分の文才のなさに呆れてます。

※このキャラクター紹介は新たなキャラクターが出るたびに、編集していく予定なので、もし良かったら見てみてください。

プロローグ（前書き）

初めて書きました。おもしろさは特に期待しないでください。

では、どうぞ

プロローグ

「なんでこうなった……」
俺はわけがわからずつぶやいた。

俺はＶＲＭＭＯ〈フルガイア・オンライン〉をプレイする一プレイヤーのはずだった。

〈フルガイア・オンライン〉とは、２×××年某日の発売されたＶＲＭＭＯのことで、機械に挿入するディスクの本来２０タイトル近く保存できるデータ量を、すべて使いきって初めてプレイできるゲームだ。

それゆえ武器やスキル、クエストの量はすさまじく、しかもプログラムが自動で生成し続けるので、クリアするのは不可能なんじゃないか？とも言われているほどだ。

そしてこの〈フルガイア・オンライン〉の育成システムは変わっていいて、最高ＬｖのＬｖ１００まで到達すると、ＳＰ（ステータスポイント）を１０残してＬｖ１から育てなおす『転生』ができるようになる。さらにこの『転生』は２５回も行えるようになっている。

俺は『転生』までに必要な経験値を稼ぎ終え、腰に付けたマジックパック――――空間魔法を利用した無限にものが入る袋だ――――から、転移クリスタルを取り出し「転移　アルケイディア」転移の言葉をつぶやいた……

そして中央都市アルケイディアの俺が贔屓にしている宿屋の一室に着くと、２５回目…つまり最後の転生を行うべく柔らかそうなベットに座った。

いつもはそれほど緊張などせず気軽にするのだが、今回ばかりは少し緊張していた。なんでも、最後の『転生』を行うと異世界に連れて行かれるとかなんとか……

まぁ、さすがにこんな根も葉もないうわさを信じているわけじゃないが、それでも緊張はするものだ。

そして俺は言う。「……『転生』」

いつものように体が粒子に変わっていくかのような感覚が訪れる。実際変わっているのだが。そのあと体を組みなおすような感覚が訪れる。

（――――なんだいつもと一緒じゃないか）

と、新しく体ができるのを待っていた時、プツン（ん？なんだ？）何かが切れるような音が聞こえそこで不意に意識が途切れた……

ドスン！！！

「げふっ…」

空中に放り出され、落ちたところで、情けない声が俺の口から洩れる。

「ぅ……いててて」

俺はあたりを見回す、そこには『転生』前の宿屋の一室ではなく、草木の生い茂る森があった。

「どこだ？ここ？」

いつもの『転生』なら、『転生』を開始したところに新たな体ができるはずだ。

……なのに目の前に広がる森は全く見覚えがなかった。（あとでゲームマスターに訴えとくか…）など考えつつ、そろそろ現実の夜も真夜中を回るはずなので、この〈フルガイア・オンライン〉から離脱するべく、心の中で“ログアウト”と念じた。

……が、いつまでたってもログアウトされない。不思議に思ったのでヘルプを見るべく“システムフルプ”と念じてみる、これも反応しない。

他のはどうなのか試してみることにし、ステータスを試してみる。

“ステータス”

空中からカードが出てくる。

できた。

白河・黒輝　〈シラカワ・クロキ〉

１７歳　　Ｌｖ１

体力：１
筋力：１
魔力：１
精神：１
敏捷：１
器用さ：１
運：１

ＳＰ残量〈５００〉

称号：なし

スキル：なし

職業：無職

装備：なし

０Ｇｉｌｌ

「ハァ！？」

俺は思わず叫んだ。本来キャラクターネームになっているはずのところが現実の名前になっていた。

それだけじゃない、今まで苦労して習得したスキルがキレイさっ

ぱりなくなっていた。そして本来２５回もの『転生』の賜物だが、それでも２５０しかないはずのＳＰが５００もある。

「ど、どうなってんだ？これ？」

ふと、森の水たまりに目が行った。その水たまりに映っていたのは俺が設定したイケメン顔なんかじゃなくって……

「お、俺！？」

こっちも現実の俺の顔で、しかも俺の体だった。

「なんでこうなった……」

プロローグ（後書き）

もし良かったら感想お願いします。

1話

俺は心を落ち着かせ、あることを思い出していた……。

『最後の転生を行うと、異世界に連れてかれる』

こんなうわさを思い出しタラリ、と汗が流れた気がする。

「じゃあ、ここって異世界？とか？」

（いや、でもステータスとか出たしなぁ……）とか一応心の中で否定しつつ、とりあえずここで生き抜くための情報を得ようと森の中を歩きだす。

「さて、村でも探すか」

ふと、歩き出したところであることを思い出し立ち止まる。

「あ、そういえばＳＰ振り分けないとな……」

俺は“ステータス”と念じ、虚空よりステータスカードを取り出し手に取る。そして俺は〈フルガイア・オンライン〉の時と同じようにＳＰを振り分けるためカードに触れていく……。

「ふぅ…こんなのもかな？」

白河・黒輝　〈シラカワ・クロキ〉

１７歳　Ｌｖ１

体力：７６
筋力：７６
魔力：１０
精神：１０
敏捷：１３５
器用さ：５０
運：５０

ＳＰ残量〈１００〉

称号：なし

スキル：なし

職業：なし

装備：なし

０Ｇｉｌｌ

俺は〈フルガイア・オンライン〉の時と同じく、魔法系のステー

タスをある程度捨てて物理系のステータスに大半のＳＰを注いだ。運に５０入れておくのは〈フルガイア・オンライン〉では運が高ければ高いほど、レアアイテムなどがドロップしやすくなったりしたからだ。……まぁこっちではどうかはわからないが。

ちなみにＳＰを１００残したのはこれからの生活においてステータスの組み方を変えることになるかもしれないからだ。

ＳＰをの振り分けが終了すると、ステータスカードが消えていった。

「さてと、村を探すか……」

俺は森の中を再び歩き出した……

……が、俺は森の中を相変わらずさまよっていた。

「……いつになったらたどり着くんだよ」

しかしＬｖ１にして７５もある体力が効いているのか息切れが全く起きる様子がない。

（代わりにため息は無茶苦茶出てくるが、）

それに運も５０と結構な量あるはずだから、歩いているだけで村に着くと思っていた……。

「浅はかだったか……？　はぁ…」

と、視界の端に舗装された道が映る。

「おぉ！！やっとか！！」

その舗装された道へ走っていく俺、その道を歩いると自然と足取りが軽くなる。なんたってもうすぐ村かなんかに着くのだろうから！！！

そんな上機嫌で俺は、その道がこの深い森に対して不自然に豪勢なことはまったくもって気にしていなかった。

しばらく歩いた俺、ふと立ちどまる。

「……」

なんだか台座みたいなとこに剣が刺さってた……。

――――――ほう…　ここにひとりでたどり着くとはなかなかやるのぅ、おぬし――――――

「うおっ！？」

台座に刺さった剣がカタカタ震えるたびに発せられるその声に身をのけぞらせる俺。

――――ん？どうした？我と契約を交わすためにここにきたのだろう？――――

そんな喋る剣に俺は一言、

「いや、ちがうけど？」

――――……え？――――

「いやだから違うって、歩いてたらたまたま着いただけなんだけど……」

――――な、なに！？いやここには結界が貼ってある故、簡単には入れないはずだぞ？――――

「結界？」

なんだそりゃ…と思いつつ、一つ考える。もしかしたら俺その結界の中に落ちたとか？

も、もしやその結界の中にいたおかげで俺いつまでたっても村に着かなかったとか……？

俺は膝をつき「マジかよ……」とひとり納得しつぶやいた。

――――ど、どうしたおぬし？急にうなだれて――――

「いや、なんでもない気にしないでくれ……」

剣に話すのってなんか不自然だな……まわりから見たら独り言を言ってるみたいだろう。

「その結界からどうやったらでられる？」

――――契約を交わせば結界は解けるが？――――

「よし、今すぐ契約しよう。そうしよう」

――――なぜ急にやる気を出すのだ？――――

「気にすんな」

――――ま、まぁ良いか。では、私の前まで来い――――

剣の前まで歩いてゆく。そして剣が契約の言葉？だと思うが、それを唱えだす。

――――我、魔剣“フィレストール”は汝、……なんじ……おぬし名前は何だ？――――

（魔剣かー。ただの剣じゃなかったんだなー。まぁ喋ってたりしてるし、そりゃそうか）とか考えながら、名前を聞かれたことに（今さらかよ）と心の中でツッコミを入れる。

「白河黒輝だ」

と一応、名前をおしえる。

――――我、魔剣“フィレストール”は汝、シラカワ・クロキの剣（ツルギ）になることを誓い、永久（トワ）に従うことを誓う。いざここに契約を…

……さぁ、我を抜け。抜くことだできたのなら契約は完了だ。――――

「そんなことでいいのか？」

――――他に何があるというのだ？どうせ弱きものに、我を抜くことなどできん――――

魔剣が小馬鹿にしたように言う。てっきり、血とか魂とか使うのとか思ってた。

俺は魔剣を片手で握り、一気に引きぬいた。

とたんに俺の視界を閃光が染め上げる……

「うわっ！？」

目を覆うため魔剣から手を離す。そして光が収まるのを待ち、おさまったところで手をどけると……

「これからよろしくおねがいします。マスター」

……全裸の銀髪碧眼美少女が　ペコリ、と可愛らしくおじぎをしていた。

「はあああああぁ！？！？」

1話（後書き）

魔剣（フィレストール）の口調が変化しますが、
これは主人公と主従関係（？）を結んだからです。
それ以外の意味は特にありません。

もし良かったら感想お願いします。

2話（前書き）

引き続き無茶苦茶な文章構成かもしれませんが、よろしくお願いします。

2話

（落ち着け、落ち着くんだ、俺……）

俺は一度、目から離した手をくっつけながら考える。……とゆうかこいつは誰だ？

「だ、だれだ？おまえ」

「そんなマスター…お前なんて他人行儀な呼び方をしないでください。私は“フィレストール”です。ちょっと長いので、フィレスと呼んでください」

（フィレストール？はて、最近どこかで聞いた気が……って！）

「お前さっきの魔剣か！？」

「だからフィレスですって」

俺はついつい手を目から外してしまうが、「おわっ」まだフィレスが全裸だったので、あわてて再度手で目を覆う。

「とにかく服着ろ！服！！」

「――――――――着終わりましたよ、マスター」

恐る恐る目をあけるとそこには、身長は１５０？くらいで、肩くらいのまっすぐな銀髪の、それなりに出るとこでてる、少し垂れ目気味の蒼い瞳を持つ美少女がいた。……メイド服で。

「……って、なんでメイド服なんだよ！！」

「？　マスターに仕えるとしたら、この服以外にどの服があるというのですか？」

ま、まさかの真顔で質問返しされてしまった。　びっくりだね。もう何も言えないよ、俺……。

そういえば、フィレスに聞けばこの世界の常識とかが多少はわかるんじゃないか？

（とゆうか、フィレスが出てきちゃったから、もうここは〈フルガイア・オンライン〉中ってことは、あり得ないよな……）

「なぁ、フィレス一ついいか？」

「はい、何なりと」

「ここ、……ってゆうかこの世界のことについていろいろ教えてくれないか？」

「この世界？マスターはこの世界の住人ではなく、別の世界のヒトなのですか？」

「あー……、まぁぶっちゃけると、そうだ。俺は日本ってとこに居たはずなんだが、気が付いたらここにいたんだ。」

一応〈フルガイア・オンライン〉のことは伏せて、フィレスにわけを話す。

「ニホン？　聞いたことがありませんね……。とても信じられる話ではありませんが、マスターの言うことなら信じれます」

ニッコリ、と笑って言ってきた。

思わず俺はその笑顔に、見惚れてしまった……。

「そ、そんなわけだからいろいろと、この世界のこと教えてくれないか？」

ちょっとつっかえながらフィレスに聞く。

「はい、まずこの世界の名前は〈フィルガイア〉。この世界は三つの国で、成り立っています。その三つの国が、『アルケイディア王国』『カティル連合国』『エンドラ島国』です」

世界の名前は〈フィルガイア〉、か……惜しいなぁ。『ィ』が

なければなぁ。　あとは、『アルケイディア王国』か、これは『大都市アルケイディア』と名前だけは同じだな、規模が違うがな。
うーん、ほかの二つは聞いたことがないな……

「んで、俺らがいるのは？」

「アルケイディア王国の中心部から少し東に外れた、アカリナという町の近くの森です」

アカリナ、これも聞いたことはないな……。

「あ、そういえばステータスカードって俺出せたんだけど、これってこの世界〈フィルガイア〉の人なら、誰でも出せるのか？」

「いえ、誰でも、というわけではありません。ステータスカードを出せるのは、ギルドに登録した冒険者だけです」

「ギルドに、冒険者？」

お、異世界にありがちな単語が出てきた。これは〈フルガイア・オンライン〉の中にもあったな。

「はい、ギルドは、三ヶ国が合同で運営する組織のことで、そこに所属して、クエストと呼ばれる人々からの依頼をこなし、報酬をもらい生活などをする人を、冒険者と言います」

うん、『三ヶ国が合同』というところ以外は、すべて〈フルガイア・オンライン〉と同じだな……。こりゃわかりやすいな、助かる。

「ならそのギルドに所属して、冒険者としてやっていければ一応生

活できたりするって事でいいのか？」

「はい、ギルドで良い成績を挙げることができれば、巨額の富だって獲得できますし、国にたくさん貢献すれば、貴族にしてもらえることもあります」

巨額の富かぁ……いいなぁ……。　って何トリップしてんだ！俺！！

「よしっ、じゃあまずはギルドに所属することだな。これからの生活費稼がなきゃいかないしな……。フィレス、ここから一番近いギルドってどこだ？」

「そうですね……ここから東に1時間くらい歩いたところです」

「い、以外と近いんだな……。俺がお前を見つける前5，6時間も歩いたのはどれだけ無駄な行為だったんろ……」

「元気出してください、代わりにもっといいことありますよマスター」

……やばい、フィレスの優しい言葉が心にしみる…。あぁ、目から汗が……。

俺はフィレスからもらった、優しさで胸をいっぱいにしながら、フィレスと一緒に北へと歩き出した。

ってあれ？俺が歩き回ったのって、フィレスの張った結界のせいなんじゃ……。

……うん、今のは気がつかなかったことにしておこう。そうしよう。

2話（後書き）

どうでしたでしょうか。一人目のヒロイン、フィレス登場です。
ハーレムにはこれから徐々にしていく予定なので、少しばかし期待して待っていてください。

もし良かったら感想お願いします。

3話（前書き）

やっぱり小説書くのは難しいです。
まだまだ駄文ではありますが、よろしくお願いします。

では、どうぞ

3話

フィレスとしばらく森を歩いていくと、中世ヨーロッパ風の街が見えてきた。たぶんあれがアカリナだろう。　しかし異世界の街っていうのはどこでも中世ヨーロッパ風じゃなきゃいけないんだろうか？昔読んだライトノベルでもそうだった気がする。

そんなこと考えていると、いつの間にやら町に入り、ギルドの前まで到着していた。

「ほー、ここがギルドかー」

結構大きな建物に感心しているとフィレスが、

「中央都市のギルドはもっと大きいはずですよ？」

とのことだ。

「さぁ、早速、冒険者としての登録に行きましょう、マスター」

「ああ。いくか」

ギルドの中に入っていくと、中には店や武器工房、それに酒場も一緒になっているようで、大いににぎわっていた。俺はそこで登録をするのであろう、カウンターまで歩いて行くと、そこに立つ受付嬢に話しかける。

「冒険者として登録したいんだけど」

「はい。そちらのお連れの方もご一緒にですか？」

「いや、こいつはただの一緒にいるだけで、冒険者の登録はしない」
「かしこまりました。ではまず、ここにサインをお願いします」
差し出された紙に『クロキ・シラカワ』と書く。一応漢字があるかわからないので、カタカナにしておいた。俺が書き終えた紙を差し出すと、受け取りながら確認してくる。
「クロキ・シラカワさんで間違いないですね？」
「ああ。あってる」
「では、クロキさんこちらに付いてきてください」
歩き出した受付嬢の後を追うと、フィレスが付いてきた。
「あ、こいつ…フィレスも一緒に連れてっていいか？」
「ええ、別にかまいませんよ」
受付嬢に許可を得てから、フィレスとともに付いていくと、何やら複雑な魔方陣と、コピー機のような機械のある部屋に通された。
「ここは？」
「ここでは、クロキさんの現在の能力値（ステータス）を測定し、カードを作るところです。では、早速始めたいと思いますので、魔方陣の上に立ってください。少し頭が痛むかも知れませんが、冒険者としてのサポート機能を体に追加するだけで、体に害はないので、安心してくだ

さい。」

俺が魔方陣の上に立つと、受付嬢がコピー機のような機械の操作を始める。すると魔方陣が光を放ち始め、俺の頭をひどい頭痛が襲ってきた。

「……ッ！」

これがサポート機能を追加する、と言うことなのだろう。しかし、この頭痛は何とかしてほしいな、うん。正直キツイ。

それらが徐々におさまると、コピー機のような機械から俺のステータスカードが出てきた。それを受付嬢が手に取りステータスを確認していると、いきなり受付嬢が驚きの声を上げた。

「えぇ！？」

「ん？どこか変な所でもあったのか？」

俺が魔方陣から離れ、受付嬢の隣からカードを覗くとこう記してあった。

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ１

体力：７６
筋力：７６
魔力：１０
精神：１０
敏捷：１３５

器用さ：５０
運：５０
ＳＰ残量〈１００〉
称号：魔剣との契約者
スキル：なし
職業：魔剣士
装備：なし
０Ｇｉｌｌ

名前の表示の仕方が変わっている。それに、称号に『魔剣との契約者』が増えていて、職業は『魔剣士』に変わっている。これらはたぶん、フィレスと契約したからだろう。

「変な所ばかりです！！Ｌｖ１なのに、一体なんですか！このステータスのでたらめさは！！」

「いや、これは最初からでな……」

やっぱりＬｖ１でこのステータスはないらしい。まあ、俺は転生者だしな。仕方がないのさ、そう仕方がないんだ。

「それに！魔剣との契約者って！一体どこで、どうやって契約したんですか！？」

「どこって、この町のちょっと離れたとこにある森の中で、普通にコイツを地面から引っこ抜いただけだが？」

そう言って俺はフィレスを指さす。すると受付嬢は、

「ええ！？あの森にはなにもないはずでしょう！？　それにその娘が魔剣なんですか！？」

「マスター、引っこ抜いたって何ですか。引っこ抜いたって……。もうちょっと別の表現をしてください」

「あ、わりぃ、今度からは気をつけるよ」

「ちょっと！無視ですか！？」

あ……、謝るのに夢中で忘れてた。少し涙目だ。あわてて質問に答える。

「ああ、こいつが魔剣“フィレストール”で、確か森の方には結界が張ってあったんだよ。だよな？」

俺がフィレスに聞くと、フィレスは、

「はい。あそこの森には入っていってある程度進むと、自然と森の外につながって、中心部には行けないように、結界を張っていました。私があそこの森にいると知って、契約しようと押し寄せてくる

輩がたくさんいて、とってもうるさいので」

「結界も張れて、人の姿にもなれるってことは、最高位の魔剣じゃないですか！！」

興奮した様子の受付嬢の言葉に驚いて、俺はフィレスを見ながら言う。

「お前ってそんなすごい魔剣だったのか、そんなんなのになんで俺なんかが抜けたんだ？」

「マスターのステータスが高いこともありますが、一番は私がマスターを気に入ったからです」

気に入ったって……。そんなんでいいのかよ、おい。

少し落ち着いて来た様子の受付嬢は、

「ともかく、これで冒険者としての登録は終わりです。そのカードはサイフの代わりになりますので、なくさないようにしてください。最後にダンジョンのことです。ダンジョンのことはある程度知っていますよね？」

確認を取ってくる受付嬢に対して、一言短くこう告げる。

「ん？ダンジョンってなんだ？」

3話（後書き）

はぁ…なかなかアイディア出てこないです。
ちょっと小説なめてました。

次回は頑張ってダンジョンでの戦闘シーンまでいければいいな、と思っております。

もし良かったら感想お願いしますー。

4話

「な、なんでダンジョン知らないんですか！？」

「あー、いや、えっと……」

ダンジョンってこの世界に普通にあるものなのか？でもフィレスは何も言ってなかったしな……

「あーっと……、そう。俺さ、ものすごいド田舎から出て来たばっかでいまいちわからないんだ。できればそのダンジョンのこと教えてほしいんだけど」

とっさに作った嘘で対応する。誤魔化せるかはわからないが、なにも理由がないのも不自然だろう。

「いくら田舎だってダンジョンのことくらい伝わってるはずじゃ……、まあいいです。じゃあ説明します」

ふう、どうにかなったようだ。ここで不思議に思われていろいろ聞かれても困るしな、助かった。田舎ありがとう！田舎万歳！

「ダンジョンとは、今から５０年前に世界各地に出現し始めた巨大地下迷宮のことです。ダンジョンには、あたりにいる魔物に比べて強いものが多いですが経験値が稼ぎやすく、冒険者がよく利用します。それに魔物からとれる部位は売れるものもあり、それでお金を稼ぐ人が多いです。まあ、割合的には冒険者の５人に４人はダンジョンでの稼ぎで生活をしています」

「ふむ……」

魔物に経験値って、完璧にゲームのようだな。まあ〈フルガイア・オンライン〉に似てる世界だし、当然と言えば当然なのか？ともあれダンジョンなら結構稼げるようだな。

「他にも、ダンジョンには希少価値の高いアイテムや武器などが眠っていることがあり、それを見つけて一攫千金しようとたくらむ人もたくさんいます。それにクロキさんが持ってる魔剣だって、もとはダンジョンにあったはずです」

「そうなのか？」

「違いますよマスター。私はずっと昔、２００年くらい前から、あの森にいました」

おまえ何歳だよ！とツッコミたくなったが、それを言う前に先に受付嬢に先を越されてしまった。

「え！？ダンジョンにあった魔剣じゃないんですか！？魔剣はすべてダンジョンから見つかった、と聞いていたのですが……」

「例外もある、ということです」

例外か…ってことはフィレスって結構すごい魔剣なのか？まあ使ってみれば自然とわかるだろう。

しかし２００年前からずっとか、だからフィレスはダンジョンのこと知らなかったのか…？

「まあ、話を戻しますが、要するにダンジョンでの稼ぎで生活して

いる人も多いので、できるのならダンジョンの稼ぎでの生活をおすすめしますってことです。稼ごうと思えば一日でいくらでも稼げますからね」

「そうなのか…」

それなら、ダンジョンに行けばいいのだろう。ステータスには自信があるし、フィレスもいるしな。

「ありがとう。教えてくれて、助かったよ」

「いえ、これくらいはお安いご用です」

俺は受付嬢に礼を言って、立ち去ろうとすると受付嬢が俺を呼び止めてきた。

「あ、ちょっと待ってください。一つ渡すのを忘れてました」

「……？」

「ここがダンジョンか…なんか似てるな」

「似てる？マスターの前いた世界にもあったのですか？」

「あ、いやなんでもない」

もちろん似てると言ったのは〈フルガイア・オンライン〉だ。でもあっちはダンジョンじゃなくて、バトルフィールド（プレイヤー同士が戦闘をするところ）だったが。

ちなみに目の前には高さ３ｍ位の門がある、その門には『ともし火の迷宮』と書いてあり、その中心を怪しげな光が渦巻いている。

どうでもいいが『ともし火』ってすぐ消えちゃいそうだな……

「さて、いくか」

俺は門の中心を渦まく光に手を伸ばし触れると、体が軽くなるような気がして視界が消えた。

【ともし火の迷宮】第一層

視界が戻ってくると、そこには少し広めの洞窟のような風景が広がっていた。

しかし不思議だ、なぜ光源がないのにほのかに明るいのだろう？

『ともし火の迷宮』だからか？

そんなこと考えていると、少し離れたところに動くものが見えた。目を凝らすと、ゼリー状の何かが見て取れた。その時頭に（スライム・Ｌｖ１）という単語が浮かんできた。これが登録した時に追加されたサポート機能とかいうのだろう。

「よし、行くか。フィレス、剣になってくれ」

「はい、マスター」

フィレスが力を込めるように目をつぶると、全身が銀色の光に包まれ始めた。それが一ヶ所に収縮すると、そこには……

銀色に輝く美しい剣があった。

4話（後書き）

すいません。
前回のあとがきに戦闘シーンを書くとか何とか言ったのですが、
そこまでいけませんでした。
次回こそ戦闘シーン書きますんで、
もし良かったら読んでください。

もし良かったら感想お願いします。

5話

そう、俺の目の前にはとても美しい剣があった。

〈フルガイア・オンライン〉の中にあった片手用直剣（ワンハンドロングソード）のようだが、それよりやや細身の刀身は、彼女の髪の色と同じく銀色の輝きを放っている。その輝きは淡く、それでいてどこか力強かった。

「キレイだな」

「え！？キ、キレイだなんでそんな……」

「いや、キレイなものはキレイだし、それに、それ以外の言葉じゃ俺は目の前の状況を表わせない」

謙遜するフィレスに俺はきっぱり言い切る。するとフィレスから放たれる銀色の輝きが、かすかに揺らいだ気がした。

「と、とにかくスライム倒しましょう、マスター」

「お、そういえば忘れてたな」

フィレスのとこばかり見ていたらスライムのことなどすっかり忘れてしまっていた。

俺はスライムの方へと近づき、改めてその姿を確認する。体長は５０ｃｍほどで、その炎のように赤く透き通った体は幻想的だが、スライムならではのドロドロ感が、台無しにしてしまっている。

しかし、初めての敵はスライム、と相場で決まっているのだろうか？　いろんなものでもスライム雑魚魔物として出てきている気がする。哀れだ。

そんなスライムに俺は先制攻撃（ファーストアタック）として、背後？（目がないのでよくわからない）から横薙ぎにフィレスを振るう。

「クペッ！？」

スライムは何処にあるのかわからない口から奇妙な悲鳴の声を上げた。そうすると、体全体が煙となって周囲に散り、もうそこには何も残ってなかった。

「ふむ、さすがＬｖ１だな。一撃とは」

「さすがですマスター。この調子でどんどん行きましょう」

「おう」

俺は短く返事をすると、ダンジョンの奥へと歩き出していった。

【ともし火の迷宮】第五層

結局Ｌｖが上がっただけのスライムしかいなかった第１～４層を

軽く突破し、第5層に差し掛かったところで、やっとこ新たな魔物が出てきた。良く見ようと目を凝らすと頭に（トクチＬｖ7）と情報が浮かんでくる。見た目はスライムより一回りほど大きな蛾で、翅の末端部に少し炎を宿していた。

Ｌｖ7は今のとこ出てきた中で、一番高いＬｖだ。そろそろ一撃で死んでしまうの以外が出てこないものだろうか？

そんなことを考えていると、トクチが空中に真っ赤な魔方陣を展開した。するとそこからオレンジ色をした火球が飛んでくる。

「おお、魔法か」

そんな言葉をつぶやくと同時に、迫ってくる火球をフィレスを使って切り裂く。そのままトクチとの間合いを詰め、フィレスを縦に振りおろす。するとスライムと同じように、煙となって散って行った。

コイツも一撃だった。命の危険がないのはいいが、少しつまらない。

不謹慎にもそんなことを思っていると、煙の中に赤い翅のようなものが見えた。目を凝らすと（トクチの翅）と頭に浮かんでくる。たぶんこういうのを売ってお金を稼ぐのだろう。

俺はトクチの翅を拾うと、腰に付けたポーチにしまう。これは冒険者の登録が終わった時にもらったもので、空間魔法を利用した特殊なポーチだそうで『いくらでも物が入り、ポーチの中に手を入れ、取り出したいものを念じるでけで取り出せる』という、なんとも便利なポーチだった。

こんなに便利なものなら高いんじゃないかと思って聞いてみたが、

受付嬢曰く、『空間魔法士と布のポーチさえあればいくらでも作れるので、無料も同然なんです』とのことだ。こんなに貴重そうな物もらえてラッキー。と最初は思ったが、そうでもないようだった。

「しかし、魔法って剣で斬れるんだな」

〈フルガイア・オンライン〉では、魔法には魔法でしか対応できなく、非常にめんどくさい仕様だったので、〈フィルガイア〉での『魔法は剣で切れる』というのは少し嬉しかった。

「ええ、しかし普通の剣などでは斬ることなどできません」

「ん？そうなのか？」

「魔法を斬ることできるのは、同じく魔力を持ったもの、つまり魔剣などでしか魔法は斬れないのです」

「なるほど……、そうだったのか」

魔力には魔力でしか対抗できない、という根本はこの世界でも同じようだった。そうするとこっちに来てすぐフィレスと契約できた俺は相当ついてるってことか。

そんなことを考えながら俺は再度ダンジョンの中を歩きだした……。

【ともし火の迷宮】第十層

結局少しＬｖの上がったトクチとスライムしか出てこず、なんともつまらない戦闘を終えた末、俺は第十層まで降りてきた。

「ん？ここは何か今までと雰囲気が違うな……」

そう言って俺は少し開けた空間を見回す。

「どうやらボスが出てくるようです、マスター」

「ボス？」

そんなやり取りをしていると、上空から何かが飛んでくる。良く見ようと目を凝らすと、（Ｔｈｅ．チューチＬｖ１５）という情報が浮かんでくる。

チューチの見た目はトクチのような蛾だが、トクチの数倍の大きさをしていて、体全体が真っ赤だった。

『Ｔｈｅ』というのが付くのボスの証なのだろう。

チューチはこれまたトクチと同じように、真っ赤な魔方陣を展開し、これだけはトクチとは違い、三つの火球を同時に放ってきた。

「はッ」

俺は掛け声とともに迫ってくる三つの火球を両断する。懲りずに、もう一度魔方陣を展開しようとするチューチに向かって俺は跳び上がり、その勢いを使って真下から一撃、そのまま真上からフィレスを思い切り振りおろす。

するとチューチは「キィィィッ！！」と、耳障りな悲鳴を上げ、煙となって散っていった。

「ボス……だよな？　コイツ、二撃だったぞ、大丈夫かこれ？」

なんか自分の攻撃力のあまりの高さに呆れつつそうつぶやく俺だった。

5話（後書き）

どうでしたでしょうか、

もし良かったら感想お願いします。

6話

おいおい、ボス二撃ってどうなんだ？ここのシステム大丈夫か？まぁ、この世界にシステムなんてものはないだろうが……。

「マスターのステータスがＬｖに反して異常過ぎるだけです。マスターは筋力値も十分高かったですが、それ以上に敏捷値、つまり剣速がものすごく速いです。それなので、マスターはとんでもない攻撃力を生み出せるんです」

「そうか……。やっぱこのステータスが原因か……そういえば、ダンジョンクリアし終わったし、ステータスも多少は上がったかな？」

俺は“ステータス”と念じて、ステータスカードを虚空から取り出し確認すると……。

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ１３

体力：８８
筋力：８８
魔力：２２
精神：２２
敏捷：１５９

器用さ：６２
運：６２
ＳＰ残量〈１２４〉
称号：魔剣との契約者
スキル：剣技【速撃型】
職業：魔剣士
装備：魔剣“フィレストール”
０Ｇｉｌｌ

……うん。Ｌｖ１３でこのステータスはやっぱりありえんだろう。能力値はＬｖが一つ上がるごとに１増えるようだが、敏捷値とＳＰは２増えるようだ。この辺も〈フルガイア・オンライン〉と同じだ。〈フルガイア・オンライン〉では、伸びやすい能力値に個人差があったが、ここでも俺は敏捷値が伸びやすいようだった。

スキルは『剣技【速撃型】』が増えていて、これも〈フルガイア・オンライン〉の中にあった。これは剣技の他にも、盾技、槍技、槌技、拳技、弓技、魔技……その他いろいろあった気がしたが、あんまり覚えていないのでここでは割愛。

そして、技系からさらに細かく派生したものが【型】で、これには、

【速撃型】…速さを重視するもの。
【重撃型】…一撃の大きさを重視するもの。
【連撃型】…技の連続性を重視するもの。

この三つがある。正確には技の系統ごとにもう少し違うものもあるらしいが、詳しくは知らない。

そしてこれらの〇技【〇〇型】のスキルを覚えて、ステータスを一定まで上げることで初めて本当の技（スキル）を使うことができる。

俺は〈フルガイア・オンライン〉の時の癖でステータスカードのスキル欄に触れる。そしてその直後、俺はこの世界では取得済み技確認用のホロウィンドウが出ないことを思い出す。――――――ヴゥン――――――って出るのかよ！！

俺は出てきた剣技【速撃型】の剣技スキルを確認するとそこには……、下位剣技に中位剣技に上位剣技、それに最上位剣技が少しだけだが習得されていた。

成長の仕方は〈フルガイア・オンライン〉のシステムと全く同じようだ。助かる。助かるのだが……

「……なんだこの最強さ加減は……」

「やはり私の目に狂いはなかったですね。さすがですマスター」

いつの間にやら人の姿に戻っていたフィレスが横からステータスカードを覗き込みながらそう言ってくる。

「さすがってなんだよ、さすがって……」

俺は今の今まですっかり忘れていたチューチの落し物（チューチの大翅）を拾い上げ、ポーチにしまいつつ、そう呟いていた。

「さ、このダンジョンはここで終わりのようです。地上に戻りましょう、マスター」

「おう」

そう短く答えると俺は左耳のピアスに手をかざす。

このピアスもポーチと同じく、冒険者として登録した時にもらったもので、マーキングすることで空間の座標をピアスに保存し、いつでもそこに転移できるようになる、というすぐれものだ。しかも座標の保存はいくらでもできるとのことなので、こんな凄いものをもらってしまってよいのか聞いてみると受付嬢曰く――――『これも空間魔法士とピアスさえあれば、いくらでも作れますから』とのことだったので、遠慮せずもらっておいた。

「んじゃ、行くか。フィレス、ほれ」

俺が手を差し出すと、フィレスが「？」と首をかしげるので、俺は言葉を付け足す。

「離れてると一緒に転移できないからな、だから、手」

「え！？あ、そ、そうですね…」

？？？　なぜかフィレスは頬を微かに染め、おずおずと手を差し出して俺の手を握る。

「よしっ、いざギルドへ！　転移！」

俺はあらかじめ座標を保存していたギルドの入り口を思い浮かべると、転移する。体が軽くなり、すぐ視界が途絶えた……。

……視界が戻ると、つい数時間前に見たばかりのギルドの入り口が目の前にあった。

「さて、魔物からいろいろ拾ったし……、さぁ金に換えよう！！」

俺は拾ったものがいくら位になるか、少しだけ期待しつつ、ギルドの中に入っていった。

6話（後書き）

どうでしたでしょうか？
もし良かったら感想お願いします。

7話（前書き）

累計ＰＶアクセス８００００００&お気に入り登録数５００突破！

ありがとうございます！これからも是非よろしくお願いします！

7話

俺はギルドに入っていき、カウンターの方へと向かうと、受付嬢に話しかける。

「買い取りお願いしたいんだけど」

「え！？もうダンジョン終わったんですか？」

「おう」

「す、すごいですね……」

「まあ、そのことはいいから早く買い取りを…」

「あ、はい、そうでした。では、品物をお願いします」

俺はポーチの中から大量に手に入れたトクチの翅３２枚と、チューチの大翅１枚を受付嬢の前に置いた。（結局スライムは何も落とさなかった。がっかりだね）

「うわ…い、今から計算しますね」

「たのむ」

さすがに目の前に蛾の翅を大量に置かれたのはキツイらしく、少し顔が引きつっている。これでちゃんと買取できるのか？不安だ。

「えっとトクチの翅が１枚２０Ｇｉｌｌで買い取りなので３２枚で６４０Ｇｉｌｌで、チュ―チの大翅は１枚７０Ｇｉｌｌなので、合計は７１０Ｇｉｌｌですね。今からカードにお金を入れるので、カードを出してください」

「わかった」

俺は“ステータス”と念じてカードを取り出すと、受付嬢の前に差し出した。受付嬢はそれを受け取ると、横にあったタッチパネルのようなところにカードを軽くあてた。そうした後、こちらにカードを返してくる。

「これでカードに７１０Ｇｉｌｌ振り込まれました」

「ありがとう。……そういえばこのステータスって他の人見せる時、必ず見えちゃうのか？」

いちいち見られた時に驚かれたんじゃたまったもんじゃない。

「いえ、本人が見せようとしなければ、名前、年齢、Ｌｖ、所持金、職業以外は見えません。でも逆にその五つは絶対に隠せません」

「そうなのか」

それは助かった。職業を見られた時は少し驚かれるかもしれないが、ステータスを見られた時よりましだろう。

「ところで、ここら辺にそれなりにキレイで安い宿とかないか？」

「それならポトさんの宿屋がおすすめです。あそこは、ギルドいつも贔屓にしている宿屋なので、カードを見せると安くなって５０Ｇｉｌｌ程になりますし、手入れが行き届いて綺麗で、しかも朝ごはんと晩ごはんまで付いているのでとってもお得です」

「おっ、そこいいな。詳しく場所を教えてくれないか？」

「えっと、場所は――――――――――――――――――――――――――――――――」

「ありがとう。助かったよ」

「い、いえっ、これくらいするのは当然ですからっ」

俺はとても丁寧に宿の場所を教えてくれた受付嬢に、できるだけの笑みで返すと、顔を微かに赤くしてそう言った。照れてるのか？

そして横のフィレスからの刺すような視線が来ている気がするが……、たぶん気のせいだろう。うん。俺にはそんな目で見られるようなことはしていない。

「じゃあ、俺はこれで」

そう言って俺はギルドを後にし、新たな寝床を目指して歩いていった……。

それから一週間がたった。

ギルドの受付嬢に教えてもらった宿屋は確かに部屋もキレイで、食事も付いていた。（ここで俺は初めてこの世界の料理を食ったが、結構元の世界の料理と似通っているものがあった）

何より風呂が付いていたのが嬉しかった。部屋に備え付けられてるのではなかったが、個室の風呂が各階に三つづつ付いていた。やっぱ風呂はいいよなー。

一週間もしてみるとこの世界の通貨〈Ｇｉｌｌ〉が、１Ｇｉｌｌにつき日本円では１００円位だということも分かった。

俺は、ギルドにこのあたりにあるダンジョンの情報を聞いては、半日もかからず攻略していく。そんな生活を一週間送ってきた。

一日に平均二つのダンジョンを攻略し続けたことで、Ｌｖもそれなりに上がり、Ｇｉｌｌもある程度は稼げている。今現在のステータスはこんなところだ。

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ２７

体力：１０２
筋力：１０２
魔力：３６
精神：３６
敏捷：２３９
器用さ：７６

運：７６

ＳＰ残量〈１００〉

称号：魔剣との契約者

スキル：剣技【速撃型】、剣技上昇、瞬間加速

職業：魔剣士

装備：黒色のレザーコート

７８００Ｇｉｌｌ

……。前から思っていたけど、これはチートすぎる気がする。

7話（後書き）

どうでしたでしょうか？

展開を急ぎすぎましたでしょうか？

スキル等の解説は次回する予定です。

もし良かったら感想お願いしますー

8話

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ２７

体力：１０２
筋力：１０２
魔力：３６
精神：３６
敏捷：２３９
器用さ：７６
運：７６

ＳＰ残量〈１００〉

称号：魔剣との契約者

スキル：剣技【速撃型】、剣技上昇、瞬間加速

職業：魔剣士

装備：黒色のレザーコート

７８００Ｇｉｌｌ

能力値は敏捷値がメキメキと成長し、ＳＰも１００だけ残してすべて敏捷値に注いだので、文字通り、けた違いだ。

スキルの方は『剣技上昇』と『瞬間加速』が増えた。これらもまた文字通りの効果で、『剣技上昇』は剣技の威力が増し、『瞬間加速』は瞬間的に本来の速度の数倍近く出せる。これらの詳しい解説は、登録した時のサポート機能が教えてくれた。

装備品の方には、ただの服は含まれないようで、防具屋で買った『黒色のレザーコート』には魔耐性上昇（小）が付いていたので、それだけが装備品に含まれたようだ。その他のシャツやズボンに、髪や目まで黒いので、全身まっ黒だ。

〈フルガイア・オンライン〉の中でもこんな配色の防具だった。

今もそれなりには似合っている…、と思いたい……。

俺はいつものようにギルドのカウンターに向かい、いつもの受付嬢に今日入ろうと思うダンジョンの情報を聞こうとすると……

「もうあなたが行くようなダンジョンはこの近くにはありません」

「…は？」

「ですから、もうあなたが行くようなダンジョンはこの近くにはありません。と言ったのです」

「え？　なんで？」

「この近くにはもう初心者が行くような下級ダンジョンしかないので、あなたに合うダンジョンがないのです」

「そうか…」

「なので、これからは下級ダンジョンから最上級ダンジョンまでそろっている、王都に移ることをお薦めします」

「え？　いきなりすぎない？」

「そんなことないです。中級者を超えただろうと思われる冒険者には、毎回お勧めしています」

「そうなのか…」

「で、行きますか？またの機会にしますか？もし行くなら王都へ、転送してくれる空間魔術師を呼びますが…」

「どうするんですか？マスター？」

「う～ん……」

悩むそぶりを少し見せるが、答えはもう決まっている。

「じゃあ、王都行くかな」

理由は簡単だ。今いるアカリナの近くのダンジョンの敵は確かに弱くて、張り合いがない。それに、王都のほうが何倍もおもしろそうだ。

「わかりました。今すぐでいいんですね？」

「おう」

「では……、シュドミナさ～ん」

受付嬢がギルドの奥の方を向いて呼びかけると、そこからローブを着て、杖を持ったいかにも魔法使いルックの、金髪メガネのなよっとした男が出てきた。

「はい？　なんでしょうか？」

「こちらは、このギルドの専属空間魔術師のシュドミナさん。そしてこちらは冒険者のクロキさん、そしてそのメイドのフィレスさんです」

「よろしくっ」

「……よろしくお願いします」

「え？　あ、はい。よろしくお願いします」

俺が軽く手を上げてそう言うと、フィレスはしぶしぶといった感じで挨拶をする。そんなだと無愛想な奴だと思われるぞー。

対して相手、シュドミナは体を四十五度ピッタリに曲げ、頭を下げていた。

「それで、なんで僕は呼ばれたんですか？」

「えっと、クロキさんたちが、王都に移るということになったので、シュドミナさんに転送してもらおうと思いまして」

「あ、なるほどそれでしたか。では、早速始めましょう」

「え？　ここでやるのか？」

今、俺たちとシュドミナは、ギルドのカウンターを挟んで向かい合っているのだが、いいのか？　これで？

「ええ、僕が知っている座標でしたら、どこから、どこへでも転送できるので、あまり関係ないんです」

「そうなのか。それじゃあ頼む」

「はい」

シュドミナは短く答え、杖の先をこちら側に向けると、ブツブツと何かを唱えだす。

それが終わると同時に、俺とフィレスの上に淡く光る魔方陣が展開された。シュドミナはこちらを見て言う。

「では、いきます。転送！ラナバスタ！」

いつも感じている転移の感覚を覚えながら、俺はこんなことを考えていた。

（あ、そういえば今日、宿に一週間分の宿泊料払ったばっかりなのに、無駄になっちゃっ――――――――――）

そこで視界と思考が途切れ、俺とフィレスは王都へと飛ばされていった……。

ドスン！！

「げふっ……」

「きゃっ……」

いつもの転移だと立ったままの状態で転移するはずなのだが、今回は空中に放り出されたらしく、俺はすっ転んでいた。体の上に何か乗っかっている気がする。少し重い。

俺は、起き上がるべく手に力を入れようとするが――――――――――――　むにゅっ

「…？」

何やら手元に弾力のある、柔らかな感触が伝わってきた。

良く分からないので二、三度、力を込める。すると……、

「あっ……」

「……え？」

「きゃ、きゃあああああ！！」

そんな叫び声と一緒に体の上の重みが消える。

体を起こし、顔を上げると、顔を真っ赤にして手を胸の前で組み、こちらを見ているフィレスがそこにはいた。――――――――――――

――――――――――って胸！？

「す、すまん！」

「い、いえ、大丈夫です。大丈夫ですから……」

「いや、でもホントすまん！！」

「……でもさわるならさわるで、事前に言ってくれれば――――――」

「？　なんか言ったか？」

「いっいえ！なんにも！！」

「？」

顔を真っ赤にしながらそう言うフィレスは、満更でもないような顔をしていた気がしたが、気のせいだろう。好きでもない男に胸なんかさわられて、喜ぶはずがない。

自慢じゃないが、この世界に来る前は［彼女いない歴＝年齢］だった人間だ。そんなことが起きるはずがない。……、これ悲しくなってくるな…。

「しかし、ここ、どこだ？」

俺があたりを見回すと、草木が生い茂る森が、目の前に広がっていた。何だこの既視感（デジャビュ）。

まさか魔剣ともう一度……、なんてことはないよな？

「たぶん、あのシュドミナさんとやらが空間の座標設定を誤ったのでしょう。全くなんて事をしてくれるんでしょうか……ブツブツ」

「そ、そうか……なら誤差も小さいはずだし、歩いていれば王都…ラナバスタ、だっけか？　そこに着くだろうしな」

「はい、いきましょうマスター」

俺とフィレスが歩き出そうとしたその時、

――――――――　きゃあああああああぁぁぁぁ　――――――――

「！？」

俺は遠くから悲鳴を聞き、止まる。いやな予感がする。

「フィレス！剣になってくれ！」

「はいっ」

そう短くフィレスが答えると、数瞬の間体が輝かせ、白銀の光をまとった剣になる。

俺はその剣を手に取ると、今の敏捷値が出せるだけの最高速度を出し、声のした方へ、駆ける。

走っていくと、少し開けた場所にたどり着く。

『グルォォォオオオオオオ！！！』

魔物が、咆哮する。

ガキィン！！　そんな音が聞こえ、魔物によって振るわれた大剣が、盾を持った少年を突き飛ばす。

その隣にいた爪（クロー）の様な武器を装備した少年は、ギリギリのところで、回避する。が、あの軽装備では、魔物の持つあの大剣を防ぐのは無理だろう。

後ろの方にいる、魔法使い風の格好をした少女二人は、すっかり腰が抜けてしまっているようで、震えながら座り込んでいる。一人は気絶もしてしまっているようだ。

その少年少女達に、魔物が無慈悲にも大剣を振り下ろすべく、大剣を肩にかつぐ。

「くそっ……間に合えぇ――――――――っ！！」

8話（後書き）

もし良かったら、感想お願いします。

9話

「くそっ……間に合えぇ――――――――っ！！」

このままただ走っただけじゃ間に合わない、そう判断した俺は〈瞬間加速〉を使う。すると、ほんの一時の間、世界が止まる。俺はそのすきに風のごとき速さで魔物と少年少女たちの前に割り込む。

ズシャァァァァァ！！

豪快なその音とともに出た激しい火花があたりに散る。

俺は魔物の大剣を剣の腹の上で滑らせ、やり過ごす。そのとてつもない衝撃に、俺は吹き飛ばされそうになる。

改めて魔物を見上げる。

そこには、歪な形をした王冠を頭に乗せた、３ｍ以上はある巨大なトカゲ男がそこには、いた。というかこちらを見降ろし、睨んでいた。（Ｔｈｅ．キングリザードマン　Ｌｖ６２）

（なんでこんなところにこんなＬｖのボスが！？）

頭にそんな疑問が浮かぶが、そんなことを考えている余裕は俺にはなかった。

（くそっ、どうする！？）

俺のすぐ裏には例の少年少女たちがいる。このままじゃ引くに引けない。

（まず距離を取らないと！）

俺はキングリザードマンの注意を引きながら横へと１０ｍ近く移動する。よし、ついて来た。

今更ながら、死ぬかもしれない。そんな考えが俺を襲う。俺はなんとかその恐怖を押さえつけ、動き出す。

キングリザードマンの大剣が繰り出す斬撃を避けて、避けて、避けまくる。たぶん、一撃でも当たると俺は負ける。だからすべて避けなくてはならない。

その間に、硬直時間（ディレイ）の短い単発技の下位剣技を次々と、幾度も、途切れさせないように、発動する。

『ディスラッシュ』右から左へ回るように、斬る。『ウォーストライク』右手を引き絞り、突く。キングリザードマンの大剣をギリギリでかわす。『サクティス』左上から右下へ、斬る。避ける。避ける。『セイフェクト』真上から真下へ、振り下ろす。『ウォーストライク』右手を引き絞り、突く。『スプラッシェト』真下から真上へ、振り上げる。『サクティス』左上から左下へ、斬る。避けて、避けて、避ける。『ディスラッシュ』、『サクティス』、『ウォーストライク』、『スプラッシェト』、『ディスラッシュ』、『セイフェクト』……俺は、続けて技（スキル）を繰り出していく。

サポート機能が、ついこの間習得したばかりの技（スキル）を、何年も練習したもののように完成したものにしていってくれる。

すると、キングリザードマンに数瞬の、しかし俺にしては十分すぎるほどの隙が生まれた。そこに俺は、少しだけ習得できている最

上位剣技の中で一番威力のある一つを叩き込む。

「『アストラル・ヴェイン』ッ！！」

放たれた俺の剣が、キングリザードマンのたくましく盛り上がった胸辺りを１ｍ程の四角形に切り裂く。これで、四連撃。今度は１ｍ程のひし型に切り裂く。これで、八連撃。その中心に最後の突きを放つべく、右手を引き絞る。

（これはおまけだぁっ！）

さらに引き絞った右手にだけ、〈瞬間加速〉を発動させる。

「嗚呼ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺は叫びながら最後の一撃を放つ。締めてこれで九連撃。これが、【速撃型】の剣技の中で二番目に連撃数の多い最上位剣技の一つ、『アストラル・ヴェイン』だ。

最後の〈瞬間加速〉を付けた突きが、その凄まじく速い剣速から、衝撃波（ソニックブーム）が起きる。それが俺の剣…フィレスに渦巻く白銀の魔力と融合し、キングリザードマンの胸辺りを深々と穿ち、貫く。

「ガァァァアアアアアア！！！」

いつしか叫んでいるのは、俺ではなくキングリザードマンの方になっていた。

「…はあ……はあ……はあ……」

後ろの方に顔を向け、状況を確認する。例の少年少女たちは、四人とも無事なようだった。

「……はあ……よかっ……た……」

そこで俺の張り詰めていた緊張の糸が途切れたのか、体から力が抜け、俺の意識が闇へと消えていった……

――――――　ユーリｓｉｄｅ　――――――

それは突然だった。

私たちは、今年で１５歳になり、ラバナスタ王都学園を卒業して

から半年がたっていた。その半年で私たちは、パーティー内の平均Ｌｖを４２まで上げた。これで安全圏に入ったので、今日は初めての中級ダンジョンに挑戦しようと、タンタラの森を進んでいた時、それは起きた。

森の開けた場所に出ると、禍々しく輝く巨大な魔方陣が私たちを待っていたかの様に展開された。

「なんだ？これ？」

「さあ？」

「誰か知らねぇのか？」

「わたくしは知りませんわ」

そんなこと言ってる間に、その巨大な魔方陣から私たちの身長の二倍はありそうな何かが出てきた。

「な、なんだよこいつは！？」

「し、知りませんわ！」

「なんでこんなところにボスが！？しかもＬｖ６２！？」

「よくわかんねぇけど、とっと逃げるぞ！」

そこで魔物（Ｔｈｅ．キングリザードマン　Ｌｖ６２）が、手に持った大剣を振るう。

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ガキィン！！

「ぐあ…っ」

とっさに盾を構えた『騎士』のアインスが、キングリザードマンによって振るわれた大剣により、吹き飛ばされる。

『拳闘士』のラルゴは、その素早さから間一髪で回避する。が、彼の装備するクローや防具では、あの大剣を防げない。

私の腰にしがみついて離れないアインスの双子の妹で、『魔術師』のアイナはいつの間にか気絶している。

それに私もすっかり腰を抜かして立つことができない。これではとてもじゃないけど、『治療術師』としての役割は果たせそうにない。

そこでキングリザードマンが、無慈悲にも大剣を肩にかつぎ、振り下ろそうと力を込め始めた。

（ああ、私の人生はここで終わりなのかな……）

そんな諦めの考えが心を満たしていこうとした時、不意にその声は聞こえた。

「くそっ……間に合えぇ――――――――っ！！」

私は声のした方に振り向こうとしたけど、それよりも速く、漆黒

の人影が私たちとキングリザードマンの間に割り込んだ。

ズシャァァァァァ！！

とてつもない轟音と、火花を散らしながら、キングリザードマンの大剣を防いでいた。

そこで漆黒の人影の姿を確認することができた。しかし確認してからさらに驚いた。その人は、私たちとさほど変わらない（多分二、三歳くらい年上の）男だったから。

そしてその男は私たちからキングリザードマンを引き離し、戦闘に入った。

男はキングリザードマンの放つ攻撃をすべて紙一重でかわし、わずかながら生まれた、ほんの小さな隙をつき、自分の攻撃を繰り出していった。

それはとても綺麗だった。

キングリザードマンの攻撃を、それはまさに風のごとくかわして見せ、放たれる斬撃は白銀の光を帯び、とても幻想的だった。

「『アストラル・ヴェイン』ッ！！」

そう言って、男が叫んでからの出来事は一瞬だった。

「嗚呼ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

八回に及ぶ白銀の斬撃は、キングリザードマンの胸辺りを深く斬り裂き、最後のはなった突きは、早すぎて光が突きだされたようにしか見えなかった。

「ガァァァアアアアア！！！」

キングリザードマンは悲鳴を上げ、その歪な王冠と、２ｍはありそうな大剣を残し、煙となって消えていった。

「…はあ……はあ……はあ……」

男はちらり、とこちらに顔を向けた。

「……はあ……よかっ……た……」

と、言い終えるとまるで糸の切れてしまった人形のように倒れ……ることはなかった。なぜなら、どこからかわからないが、突然出てきたメイドさんが体を支えたからだ。

私は、まだ腰にしがみついたまま気絶しているアイナを少し強引に離し、その男とメイドさんのもとへと走っていった。

……私が初めて恋してしまった男性（ひと）のもとへ。

9話（後書き）

頑張って更新はしているんですが、
中々難しいです（苦笑）

と、ここで突然ですがユーリ達の外見を簡単に紹介！

ユーリ…腰までまっすぐに伸ばした黒髪に、オパール色の目。出るとこが出てる美少女。

アインス…短くそろえた明るい茶色の髪に、碧眼。がっちりとした体、どちらかというと美少年？

アイナ…肩まである明るい茶色の髪に、碧眼。こっちはペッタンコな美少女。

ラルゴ…手入れをしていない様なくすんだ金髪に、こちらも少しくすんだ碧眼。ほっそりとした体、こちらもどちらかも言うと美少年？

とまぁ、こんな感じです。
もし指摘や感想があったら、是非ください！

１０話

俺は目を開く。
そこには見しらぬ天井があった。

俺が今横たわっているらしいベットは、えらく寝心地が良い。ものすごく寝心地が良くて、このまま二度寝してしまいたいほどだ。ほどなんだが……

「ここはどこだ？」

そう、俺はこの場所を知らない。
俺はゆっくりと体を起こし、そこらへんを見回すが、そこには俺が今の今まで寝ていたのと同じベットがたくさんあるだけで、他にはほとんどない。

（あの戦っていた森から瞬間移動でもしたわけじゃあるまいし・・・・・・・）

そんなことを考えていた時、不意に窓の外の景色が目に入った。
そこには、森で見た蒼く澄んだ雲ひとつない空ではなく、さまざまの星たちが輝く闇色の空に変わっていた。

ガチャッ

「あ、マスターやっと起きましたか？」

ドアの開く音とともに、今はもう見慣れたメイド服に身を包んだフィレスが入ってきた。

「おう。それで早速質問なんだけどさ、……ここってどこだ？」

「ここは、王都にあるギルドの医務室です」

「医務室？　俺ってどっかの森で、あのでっかいトカゲ男と戦っていたんじゃなかったっけか？　そういえば、あの四人は無事か？」

「あまり覚えていないんですね……。
マスターは森……タンタラの森と呼ばれているらしいですが、そこでそのでっかいトカゲ男と戦って、勝って、そのあとすぐ気絶しちゃったんですよ」

「で？　そのあとはどうなんだ？」

「そのあとは、マスターが助けた四人が、あの転移できるピアスを使ってこのギルドまで転移してきて、医務室に運んだんです」

「と、言うことはあの四人はちゃんと無事なんだな？　そりゃよかった……」

思わず口から安堵のため息が出てくる。つか、森から瞬間移動（もとい転移）して来たって俺の推測は当たっていたらしい。意外すぎる。

「その四人は、今日はもう夜遅いので帰ったのですが、なぜかその中の一人が中々帰ろうとしないで、ここに残ろうと粘っていて大変でしたよ」

「ふーん」

全員無事に帰れたなら安心だな。いやー本当に良かった。

「マスターその残ろうとした理由、何か知らないんですか？」

「ん？　いや、知らねぇよ？」

おい、フィレス。なぜこちらをジト目で睨んでるんだ。

……そういえば、

「なあ、フィレス。もしかしてさ、俺ってもう起きたし、ここから出て行った方がいい感じか？」

医務室のベット貸してくれたからと言って、そのまま止めてくれるかどうかはわからない。もし出て行かなくちゃならないのなら、出ていくで早く宿を探さなくてはいけなくなる。野宿は嫌だし。

「あ、そのことなら、さっきここのギルドマスターに聞いてきました。それで、『ベットもたくさん余ってるし、別に泊まっていってくれて構わない』って言ってましたから、大丈夫だと思います」

「そっか。それなら良かった」

どうやら今夜は追い出されないらしい。まあ、俺は一応けが人だから大丈夫かもしれないと思ったが、フィレスのことも了承してくれたし、本当に良かった。

……いや、改めて考えると、この状況でフィレスだけ追い出すって、人には普通は無理じゃないか？　できるのなら、それは人以

外のものに違いない。

そんな風に考え事していたら、フィレスが、

「あ、マスターお腹空いてないですか？　何か食べるもの貰ってきましょうか？」

と、言ってくれて、そこで初めて俺は自分の胃が空腹を訴えていたことに気がついた。

「おう、頼む」

そう短く俺が答えると、フィレスは小走りで医務室を出て行き、食べ物をもらいに行った。

「お！　これ美味いな！」

俺はフィレスが先ほど持ってきてくれたサンドイッチ（これは元の世界と料理名も同じらしい）を頬張りながら、感想を述べた。

具は、オーソドックスな感じで、トマトにレタス、それにハムが挟んである（これらのここの世界での名前は知らないが）。

これらを麦で作った感じのパンで挟んだもので、みずみずしくて、相当美味い。トマトや、レタスとかは微妙に見た目は違っているが、味はそのままだ。

「そ、そうですか？」

「ああ、俺が食ったことあるサンドイッチの中で最高に美味いな！」

「ほ、本当ですか！？」

なぜか頬を染めながら詰め寄ってくるフィレス。嘘は言っていない。

まぁ、元の世界でもサンドウィッチなんで食ったのコンビニのくらいだけどな。

「そ、それ実は私が作ったんですよ」

「そうなのか？　お前料理なんて出来たんだな」

「む、難しいのは無理ですけど、それくらいなら作れます」

フィレスに料理が出来たなんて初めて知った。２００年も台座に刺さってたし、てっきり出来ないかと思ってた。

「そうかー。そんなら難しい料理も作れるようになってくれよ。フィレスが作った他の手料理も食べてみたいしな」

「はいっ！」

そう言って、満面の笑みで返事をするフィレス。これは今後の食

事が楽しみになってきたな。

その後は眠ることになった。俺はさっきまで寝ていたし、すぐ寝付けないかと思ったが、思ったより体に疲労がたまっていたらしく、すぐ俺を睡魔が襲ってきた。

「じゃあフィレス、おやすみ」

「はい、おやすみなさい。マスター」

フィレスが隣のベットに寝ているのだが、そんなことを意識する間もなく、俺は深い眠りに落ちて行った……

……しかしこのベット、持ち帰りとか買い取りとか出来ないのだろうか？　この寝心地なら正直どこでも寝れる気がする。気のせいか？

１０話（後書き）

どうでしたでしょうか？
もし良かったら感想お願いします。

11話

例の最高の寝心地のベットから目覚めると、すっかり疲れも取れたようで気分爽快だった。

昨日の夜と同じサンドイッチを朝食にもらい、それを食べ終えたころ、

「ギルドマスターがお呼びです」

と、ギルドの人から言われたので、今はフィレスとともにギルドマスターの部屋へと案内されている。

「着きました。ここです」

そう言って一つの扉の前で立ち止まる。

「では、私はこれで」

「おう。ありがとう」

そう短くお礼を言うと、ギルドの人は頭を下げてその場を去っていった。

「さーてと、いきますかー」

俺はそう言って目の前の扉を確認し、「失礼しまーす」と、かつ

ての高校の職員室に入っていったときのノリでギルドマスターの部屋へと入っていった。

部屋の中には柔らかそうなソファー（ここではソファーと呼ぶかはわからんが、俺の中ではソファーで）に腰かけた男がいた。

男は健康的に日焼けした肌に眼鏡をかけた『伊達男』といった感じの男で、たぶん歳は４０代くらい。その男はこっちを見ると、こう言ってきた。

「お、やっと来たか。ほら、立ってないで座ってくれ」

そう言って男はソファーを指さす。俺はそこまで歩いていき、男と向い側のソファーに座る。その隣にはフィレスが座った。

「まずは自己紹介からかな？私は、このラバナスタのギルドでギルドマスターをしている、グイル・ガーラナだ。よろしく」

「俺は冒険者のクロキ・シラカワ。こっちは、えーっと……メイドのフィレスだ。よろしく」

その言葉と一緒にフィレスが隣で頭を下げる。

ここでフィレスのことを魔剣だとか言うと、前のアカリナのギルドの受付嬢みたいに驚かれたりしそうだから、フィレスが魔剣だということは伏せておく。だいたい、俺はそんな話をしに来たつもりはないし、あっちもそうだろう。

「そうしたら次はお礼だな。我がギルドの貴重な人材を救ってくれてありがとう。彼らは、半年でパーティー内の平均Ｌｖを４０近くまで上げた、将来有望な冒険者たちなんだ。本当に助かった」

「いや、こっちは好きでやったことだし、そんなお礼を言われることはしてない」

というか、半年でＬｖを４０まで上げれば、将来有望な冒険者って言われるほどなのか……そうなると一週間で２７まで上げた俺はどうなんだ？　ゲームはこれくらいのペースが普通だったんだが……

やっぱり、この世界で俺はチートなんだな。

「ところで、どうしてあんな森にＬｖ６２の魔物が居たんだ？　しかもボスだったが」

「それがこっちも良く分からないんだ。襲われた本人たちは、突然目の前に魔方陣が展開されて、そこからボスが出てきた。って言っていたから、召喚系の魔法かと思ったんだけど、ボスを召喚する魔法なんてこれまで聞いたことがないんだよ」

「そうなのか……」

結局あのボスのことはわからずじまいか。

今後はこんなことは起きなければいいのだが……

「それでだね、少し話は戻るのだが、彼らを助けてくれたお礼として君に報酬金を出したいと思うんだ。具体的な金額はこれくらい」

そう言ってグイルはこちらに小切手のようなものを差し出してくる。その内容を確認すると……

「ご、五十万！？」

そこには『５００００Ｇｉｌｌ』と書いてあった。
１Ｇｉｌｌは日本円に直すと大体は百円位だから……五千万円か！？

「本当はもう少し上げても良いかもしれないんだが、キリの良い感じだとそこらへんかと思ってね」

「いや、さすがにこんなには……」

「いやいや、これ位は貰ってくれ。そうじゃないと私が満足できないんだよ」

「そ、それなら遠慮なく……」

そう言って、俺は受け取った小切手を腰のポーチにしまう。

「それと、あのボスが落としたっていうアイテムはカウンターに預けてあるから、その小切手を交換するときに一緒に貰ってくれ。話は付けてあるから」

「わかった」

しかし、王都に来て早々にこんな臨時収入が入ってくるとは……
あの転送してくれたシュドミナのミスに感謝した方がいいかもしれない。

「それでは、これからも国のため、ギルドのために頑張ってくれたまえ」

「ああ、まかせとけ」

グイルのその言葉に俺は、にやりと笑みを浮かべながらそう返し、部屋を出て行った。

「この小切手を金に換えてほしい。それと、ボスが落としたっていうアイテムも貰いたいんだけど」

俺は腰のポーチから取り出した小切手を、カウンターにいた受付嬢に差し出しながらそう言った。

「あ、この小切手は……」

「？　どうかしたのか？」

「もしかして、噂になってるあのクロキさんですか？」

「そうだけど……噂って何？」

「それはもちろん、昨日、格上のボス相手に一人で突っ込んでいって、そのまま一人で倒してしまった全身真っ黒な青年がいる……そういう噂です」

「あー、それか。もう噂になってるか、早いな……　でも、なんでそれだけで俺の名前が分ったんだ？」

俺はこっちの世界に来てあんまり時間もたっていないし、俺の名前を知っている奴なんてそうそういないはずなんだが……

疑問に思ったことを受付嬢に聞いてみると、意外なことにその答えは真横から返ってきた。

「それなら、マスターが寝ていた時に、私が少し話しました」

「お前かよ！」

なんでお前が喋るんだ……変な風に目立ったらどうする。

「噂に聞いたとおり全身真っ黒で、カッコイイですね～」

「いやいや、そんなお世辞要らないから」

「いや、お世辞じゃないですよ？」

何を言ってるんだろうかここのギルドの受付嬢は。真顔で冗談なんて言うものじゃない。俺がカッコイイわけなんてないだろう。

「とにかく、金とアイテムを頼む」

「あ、はいー。では、カードをお願いします」

俺はカードを取り出し、受付嬢に渡す。アカリナのギルドと同じように、機械にカードを押しつけた後、こちらに返してくる。

「これで振り込まれました。あと、アイテムですが、ここではとても出せない大きさだったので、こちらに入れました」

そう言って１０ｃｍ四方ほどの箱をこちらに渡してくる。

「これは？」

「冒険者が持っているポーチの下位版……と言った所でしょうか、ポーチ程の容量は入りませんが、重量を消したりできる箱です」

「へー……」

俺はその箱を受け取ると、一応ポーチにしまう。

「じゃ、ありがとう」

「はい。これからも頑張ってくださいねー」

その言葉を聞いた後、俺はギルドをいったん出るべく歩き出そうとしたら……

「あ――――――――――――――――っ！！！」

なぜか、黒髪巨乳の美少女が俺のことを見てこちらを指さし、目を見開いて固まっていた。

え？　なぜに？

１１話（後書き）

今日、見てみたらお気に入り登録が四桁超えててびっくりしました。
ありがとうございます！
これからもどうかよろしくお願いします！

どうだったでしょうか？

もし良かったら感想おねがいします。

12話

「あ――――――――――――――っ！！！」

その声がした方へ振り向くと、脱兎のごとくこちらに駆けてくる黒髪巨乳の美少女が目に入った。いや、別に逃げてるわけじゃないと思うけど。むしろ向かってきているのだけど。

その美少女は俺の目の前に来ると、おれの肩を掴み、なぜかこちらに詰め寄ってきた。

「か、体は！？昨日はずっと寝込んでましたけど、体は大丈夫なんですか！？」

「あ、ああ。体は大丈夫だけど……　別に、ただ疲れて寝ていただけだし」

「そ、そうなんですかぁ……」

心の底から安堵した様子の美少女。

どこの誰だかは良く分からないが、どうやら俺のことを心配してくれたらしい。それは素直にうれしい、嬉しいんだけど……

「えっと、そろそろ離れてくれるかな……？」

目の前に美少女の顔があっては話が進みそうにない。それに、その……胸が当たってる。それ自体は嫌なわけじゃないが、困る。

「……！」

俺の言葉を聞いて今の自分の状態を知ったらしい美少女が、ボッと頬を染め、見事なバックステップ。そのあとはもじもじと俯いてしまった。

「えっと君は？」

「あ、えっと、私ユーリ・クライノといいます。あの……私のこと覚えてませんか？　タンタラの森で助けてもらったんですけど……」

タンタラの森？タンタラの森ってことはまさか……

「もしかして、あのボスの時の？」

「はい！そうです！あの時はありがとうございました！　えっと……？」

「ああ、俺はクロキ、クロキ・シラカワ。で、こっちはメイドのフィレスだ。よろしく」

そう言ってフィレスの方を指さす。フィレスはギルドマスターの時のようにペコリ、と無言で一礼。……した後、なぜか目を細め、何かを見定めるようにこちらを見てくる。いや、なんで？

「あ、はい。よろしくお願いします。あの、メイドさんがいるって事はもしかして貴族の方なんですか？」

「ああ、フィレスが居るのには色々と事情があってさ。とにかく俺は貴族じゃないよ」

やっぱりというか、どこにでもいるんだな、貴族。典型的なバカ貴族みたいのと遭わないといいけど……

「そういえば、タンタラの森では後三人くらいいた気がしたけど、今日はいないのか？」

そこにベストタイミング（？）な感じで、女の子の声が割り込んできた。

「ちょっと、ユーリ。急に走ってどうしましたの？　……あ、この方は……」

その声とともに、明るい茶色をした髪を肩まで伸ばした碧眼の美少女がこちらに歩いてくる。

その後ろからは、同じく明るい茶色の髪を短く揃えた碧眼のガッチリとした体を持つ少年が歩いてくる。髪や目が同じ色だから兄弟だろうか？　その隣には『あんまり手入れはしていない』と言った感じのくすんだ金髪の少年がいる。……なぜか少年二人は俺のことを軽く睨みながら。なぜだ？

「俺はクロキ・シラカワ。こっちがメイドのフィレスだ」

「わたくしはアイナ・ローレル・シェルキナです。昨日はありがとうございました」

「僕はアインス・ローリエ・シェルキナです。先日のことは感謝しています」

「おれはラルゴ・バサンダ。この前は助かった」

「気にしないでくれ。こっちが好きだやったことなんだ」

自己紹介の後三人を見渡すが、皆美少年に美少女といった感じだ。これ俺だけ浮いてないか？

しかもアインスとラルゴはまだこっちを睨んでるし……

「あの、メイドを連れているということはもしかして貴族なのですか？　その割には見たこともありませんが」

と、アイナが聞いてくる。やはり〈メイド連れている＝貴族〉なのだろうか？　それなら、これから一々「貴族か？」なんて聞かれると面倒だし、フィレスには違う格好をしてもらうべきだろうか？

「ああ、俺は貴族じゃない。こいつも実は本当のメイドってわけじゃ「私はマスターのものです」って何言ってんだお前は！？」

ここに来て初めて口を開いたかと思ったらとんでもない発言をしてくれる。やめてくれ、本当に。

「も、もの？　貴方はメイドにどんなことをさせてますの？」

「もしかして、もう私入る隙間もないの……？」

「……何をしたんですか、あなたは」

「……なんでユーリはこんなヤツのことを……」

「違う！断じてそういうんじゃない！」

「本当ですの？」
「嘘言ってどうする！」
どこか腑に落ちないといった感じの少年少女たち。勘弁してくれ。
「と、とにかく、俺は宿探さなくちゃならない、だからもう行く。じゃあな」
そう言って立ち去ろうとギルドの出口へと体を向けると。
「あ、あの！」
突然ユーリが大きな声を出すので振り返る。
「も、もし良かったら、私の親がやってる宿に来ませんか？」
「え？」
「あ、い、嫌だったらいいんです！」
「いや、ありがとう。お言葉に甘えさせてもらうよ」
「ほ、本当ですか！？」
「こっちこそ本当にいいのか？」
「はい！是非！」
満面の笑みになるユーリ。これは……相当可愛い。たぶんすご

くモテることだろう。

「ふーん。意外ね、あのユーリがこんな大胆なことするなんて。そんなに気になっていますの？」

「ア、アイナ！違うってば！」

とにかくラッキーだ。町で聞きこみでもして宿を探そうと思っていたんだか、宿の方からやってきてくれるとは。

「と、とにかく、今日のダンジョンの攻略は休むから。みんなごめんね！」

そういうとユーリは俺の手を握り、先立って歩き出した。フィレス、アインス、ラルゴからもの凄い視線が集まる。だから、なんでだ？

「ちょっと待ってください！」

そこでアインスが声を張り上げ、こちらに歩いてきた。

「クロキさん、僕と一回決闘してくれませんか？　もちろん手加減などは抜きで」

「かまわないが、なんでいきなり？」

「そうでないと、諦めがつかないのです」

「諦め？　何に対してだ？」

「全てです」

全てって何だそれ。俺が何をしたっていうんだ？

「待ってくれ、おれもそこに入れろ」

と、ラルゴまで入ってくる始末。だからどうした？　急に。

「このままじゃおれも諦め切れねぇ。だから、戦え」

「まあ、良いけど……　だがどこで戦うんだ？　さすがに今ここでって訳にはいかないだろ？」

「それなら、決闘場に行きましょう。あそこは決闘するためにあるんです。今の状況にちょうどいい」

「わかった。それなら行くか」

そう言うと俺たちは、オロオロしたユーリと、心底愉快そうに笑っているアイナ、それに俺の横に立っているフィレスを引き連れて、決闘場へと向かって行った。

なんでこう俺は、厄介な感じの出来事に巻き込まれてるんだ？
このチート能力のせいか？　はぁ……

１２話（後書き）

どうだったでしょうか？
もし良かったら感想お願いします。

13話（前書き）

13話

そんなわけで俺は今フィレスと一緒に決闘場の控え室にいる。

本当は一人で戦うはずだったのだが、「フィレスも一緒に戦う」的なこと言ったら決闘場の係りの人が、「じゃあ二対二で良いですね、人数的に」とか言ったのでこの状況だ。いや、そういう意味じゃないんだけど。というか、二対二だと決闘の意味ないんじゃ……？

要は、この世界に来て初めての対人戦は実質、二対一っていう不利な状況から始まる。

なんかもう帰りたくなってきた……。そういえばあのアホな幼馴染はちゃんとやっているのだろうか？　またなんかやらかして無ければいいのだけれど……　心配だ。

そんなこと考えてると係りの人が「時間です」とのことなので、控え室を出ていくと……

ワアアァァァ！！！

大きな歓声が耳に入る。辺りを見回すと、人、人、人。

……しくじった。控え室で異様に待たされたのはこれが原因か、これなら前もってフィレスを魔剣の状態にしておくべきだった。絶

対に余計な注目が集まる。

そこで俺の反対側の控室から出てきたアインスとラルゴに向けて問いかける。

「……なあ、なんでこんな人が集まってるんだ？　というか、いつの間に集めたんだ？」

「決闘なんてめったにありませんからね、皆面白がって見に来てるんですよ。集めるのはついさっき、町中に放送していたじゃないですか」

「……マジか……」

町中に放送なんてしたのか？　考え事してから耳に入ってなかったとか？　聞いてないぜ、おい……

出来れば変な注目は集めたくないんだけどなあ……

「決闘の前に一つ、あなたに聞きたいことがあるんですがいいですか？」

「なんだ？」

「ずばり、あなたのＬｖは？」

「お、それは俺も気になってたぜ」

俺のＬｖか、Ｌｖは確か……

「確かＬｖ２７……だったかな？」

「それなら僕より１５も下なんですね、これなら十分勝てそうです」
「俺もいけそうだな」
「むっ……」
正直俺は大人げなく、あいつらの言葉にカチンと来た。
「それならとっとと始めよう」
「武器は持たなくていいのですか？」
「ここにいるからいい」
その俺の言葉に「？」といった感じのアインスとラルゴ。そのまま疑問顔でいやがれ。
「とにかく早く始めよう。俺は早く帰って寝たくなってきた」
「……おれ達をバカにしてるのか……？」
「いや、そんなつもりはないけど？」
そこで係りの人のアナウンスが俺達の会話を打ち切った。
『では、決闘のルールを確認します。飛び道具や暗器等は無し。相手が気絶するか、降参したら決闘終了です。結界が貼ってあるので、刃が当たっても切れることはありませんが、骨折等はするのでご了承ください』

凄いな。刃が当たっても切れないって、便利な結界があったもんだ。

『それでは……始めっ！』

「フィレス」

「はい」

俺は開始の掛け声とともにフィレスの肩を掴み、呼びかける。

その呼びかけにフィレスが答えた時にはもう、俺の手に白銀の魔剣（フィレス）が握られていた。

「なっ……！」

「はあ！？」

驚いた様子のアインスとラルゴ。だが、重い鎧を身につけ、盾を掲げて突っ込んでくるアインスは止まらない。

ラルゴはその場に静止している。どうやら順番で戦うらしい。

アインスは盾の下から片手剣を振り上げる。その片手剣が、蒼い魔力を纏っていることから、たぶん技（スキル）。あの魔力はゲームでいうライトエフェクトで、アインスが使っているのは、纏ってる魔力の輝きからしてたぶん中位剣技だ。

アインスの片手剣はそこから横薙ぎに一撃。確かこれは剣技【重撃型】の〈クロス・ブレイク〉。

当てれば相手を、二秒近くも昏倒できる優秀な技だ。だが、それ

は当たらなければ意味がない。【重撃型】の剣技故に遅いその斬撃を、俺は難なく避けてみせる。

そのあとも技(スキル)とただの斬撃を織り交ぜながら攻撃を仕掛けてくる。

しかし、パワーに重点を置いた攻撃であるため、どれもスピードが遅い。一撃当たればすぐ気絶してしまいそうな斬撃だが、いかんせん当たらない。

「ほらほら遅いぞ」

「くっ……」

「そろそろ終わりにしようか」

俺はその言葉が終わると同時に瞬間加速を発動。

素早くアインスの背後に回り込み、がら空きになっている右の脇腹に一撃。

ガキィンッ！

結界があったので斬れはしなかったが、アインスは横へ盛大に吹っ飛んでいった。よし、ちゃんと気絶してる。

「次はおれだぁっ！」

休む暇も与えてもらえず二戦目。

正面からラルゴの右ストレートが飛んでくる。俺はそれを魔剣(フィレス)の腹でいなす。

「あぶねっ」

その後も、時々オレンジ色の魔力を纏った拳などを間髪いれずに細かく放ってくる。

蹴り技まで入ってくるから、手数が多くて困る。こっちは片手剣一本だって言うのに。弾くのが大変じゃないか。

「オラッオラオラオラオラオラァ！」

キン、キキィン、キィキン、キキキィン。

しかし速いな……。これ、下手したらキングリザードマンくらい早いんじゃないか？

……いや、僅差でキングリザードマンの方が早いか？

はあ、もう弾くのも面倒くさくなってきた。早く帰って寝たい……。次で終わりにしよう。

「はッ！」

俺は掛け声を上げながら、結構な速度で突き上げられたオレンジ色の輝きを放つアッパーを魔剣（フィレス）で大きく弾く。

「うをっ……」

ラルゴが大きく体勢を崩す。俺はラルゴが大勢を戻す前に、魔剣（フィレス）を中段に構え、真正面に突き出す。そのまま鳩尾辺りに命中。「がっ……」そんなうめき声とともにラルゴも気絶した。

『決闘は終了しました。勝者、クロキ・シラカワとフィレストール！』

おい、実名出すのかよ。

ワアアァァァァ！！

その大きな歓声の中には、

「すげぇ！　あの二人の攻撃を一回も受けないでのしちまったぞ！？」

「あれって魔剣だよな！　本物か！？」

「アイツどこの誰だ！？　見たことねえぞ！？」

などが聞こえてくる。あげくの果てに、

「キャー！カッコイイー！」

「抱いてー！」

やらまで聞こえてくる始末。冗談でもやめてくれ。

……ああ、思いっきりやっちまった俺がバカだった。これは絶

対に明日から俺の生活が荒れる。絶対に。

こんな事になるなら、軽々しく決闘なんて受けるんじゃなかった……。

13話（後書き）

どうでしたでしょうか？
もし良かったら感想お願いします。

14話

「ああ、なんだってこんな事に……」

というわけで決闘を終え、再び控え室に戻ってきた俺。
これから起こるであろう非常に面倒くさい事態に頭を抱えている。

「大丈夫ですよマスター。どんなことが起ころうと、私はマスターの傍にいて、マスターのことを支え続けますから」

その声を聞き、顔を上げると、ニッコリと聖母のような頬笑みを浮かべるフィレスが、俺の横にぴったりとくっついて座っていた。

「うおっ！？」

思わず少し避けてしまう俺。
［彼女いない歴＝年齢］のまったくもって残念な経歴を持つ俺は、こういった女の子との触れ合いに慣れてないため、反射的にこうなるらしい。前触れとかがあれば全然問題ないのだが、いきなりだとどうもこうなってしまう。（ユーリの時は駆け寄って来るのが見えていたので、何とかなった）
ああ、我ながらなんて情けない……

「あっ……逃げなくても良いじゃないですか……」

「いや、逃げたわけじゃなくてだな……」

むー、と納得いかなそうにむくれた顔をしているフィレス。

正直その顔は少し……いや、相当可愛かった。

「でも、『傍にいる』って言ってくれてありがとう。すごく嬉しい」

こうやって誰か一人でも自分の傍にいてくれるのは、凄く幸せなことだと思う。

なぜなら、自分は独りじゃないと感じることが出来るから。……だから俺は、俺の傍にいてくれる人は出来るだけ自分の力で護りたいと思う。何の因果か知らないが、この世界ではチート級の力を持っていることだからな。

「え？　あ、いいえっ、それくらい契約を交わした魔剣には当然のことですからっ」

俺の言葉を聞いたフィレスは、早口でそう言った。

顔を真っ赤にしているから、恥ずかしかったのかも知れない。そんな姿を見ていると、なぜか自然と口元に笑みが浮かんだ。

そこで控え室のドアからコンコン、とノックの音が聞こえてくる。その音に「どうぞー」と返事をすると、キィ…と微かな音を立てて、ドアが開いた。

「決闘、お疲れさまでした」

それが控え室に入ってきたユーリの第一声。

「おう、すげぇ疲れたよ……」

「そうなんですか？　決闘中も、決闘が終わった後も疲れているようには見えませんでしたが……」

「いや、身体的には問題ないけど……　精神的に、さ」

「精神的に……？　あ、そういえばフィレスさんって魔剣だったんですね！　クロキさんがメイド連れているのに貴族じゃないって言っていた理由がやっとわかりましたよ！」

「ま、そういうこと」

「へぇ～、すごいですねぇ～」

今更、隠すに隠せないので素直に肯定。

どこで手に入れたかだとか、どうやって手に入れたのだとか、根掘り葉掘り聞かれるものかと思ったが、ユーリは全くそういった事を聞いてこないらしい。助かる。

「そういえばもう一人……アイナ、だっけか？　あの娘は？」

「アイナは、アインスとラルゴの方に行ってます。　あっ、そうだ！　アイナにクロキさんとフィレスさんも呼んできてほしい頼まれていたんだった！」

？　どうして今更俺らのことを呼ぶんだ？

……もしやまた厄介事か？　違うといいけど……

「そういうわけでちょっと付いて来てくれませんか？」

「おう、わかった。　フィレス、いくぞー」

「はい、マスター」

そのまま俺たちは控え室を後にし、ユーリの案内のもと、アイナ達のいる控え室に向かって行った。

「は、はぁ？　パーティーに入ってくれ？」

「そうですわ」

何とびくっり、アイナが俺たちを呼んだ理由はパーティーに俺らを入れる為らしい。でも、なぜだ？

そのまま疑問を口にすると、

「もちろん、貴方の戦闘の実力を知ったからですわ。あの戦闘力がわたくし達のパーティーに入れば、魔物との戦闘がとても安定した物になりますし。それに……、貴方が入れば喜ぶ人がいますしね」

そのでアイナが横眼でチラリ、とユーリを見る。

「……ぁぅ」

ユーリは顔を赤くして俯いてしまった。

というか、何故俺がパーティーに入るとユーリが喜ぶんだ？

「というかだな、俺のアイツらはついさっきまで決闘していたような仲なんだぞ？　それがいきなりパーティーメンバーって無理があ

るだろ。連携だってうまくいきそうにないぞ？」

そう言って俺はアインスとラルゴの方を指さす。

「兄様もラルゴも了承してくれましたよ？」

「アイナの頼みですし、……何よりユーリの為ですから……」

「そうだ、ユーリの為……だから、な……」

「うそだろ！？」

あれだけに俺のこと睨んでいたくせに、パーティーメンバーになるのを了承するとは。アイナは一体何を吹き込んだんだ。いや、俺はアイナのことを良く知っているわけじゃないが……

「それで？　パーティーに入ってくださいますか？」

「うーん……」

パーティーの誘いはそれ程に厄介事なわけじゃない。むしろ良いこともある。魔法による支援とかも受けられるだろうし、確かに戦闘が楽になるだろう。（別にこれまでやってきた戦闘が苦だったわけじゃないが）

経験値は分担されるため、少し減ると思うが（ゲームと同じ仕様なら）その分、効率が上回るはず。

――――――――何より、アインスとラルゴの『お前、とっととパーティー入れよこの野郎』みたいな視線が痛い。いや、こんな言葉づかいじゃないと思うけど。

「わかった。俺もそのパーティーに入る」

俺のその言葉にアイナは当然だろう、といった感じ。ユーリはどこか安堵しているように見える。そして、やっとアインスとラルゴの睨みが収まった。

「ようこそ、わたくし達のパーティー〈イーズ・ブリーズ〉へ。歓迎しますわ」

「ん？　パーティーに名前なんてあるのか？」

「？　ギルドに名前の提出を義務づけられているでわありませんか」

「そうなのか」

〈フルガイア・オンライン〉には一々、パーティーに名前なんてつけなかったが……　この世界オリジナルか？　ま、いいか。なんでも。

「それでは、改めて自己紹介も兼ねて、ステータスカードを見せあいましょうか」

そういうと皆がステータスカードを取り出し、こちらに差し出してきた。それを確認すると……

〈ユーリ・クライノ〉

１５歳　　Ｌｖ４１

体力：２３
筋力：２３
魔力：１２８
精神：１０３
敏捷：４１
器用さ：４１
運：４１

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：魔技【支援型】【光術型】、支援技上昇、回復技上昇、詠唱短縮

職業：治療術師

装備：神聖なローブ、加護を受けた杖

５８６８０Ｇｉｌｌ

〈アインス・ローリエ・シェルキナ〉

１５歳　　Ｌｖ４２

体力：１５４
筋力：１２６
魔力：２２
精神：２２
敏捷：３０
器用さ：２８
運：２８

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：剣技【重撃型】、盾技【重撃型】、盾技上昇、守護範囲増加

職業：騎士

装備：鋼鉄のブレスプレート・一式、鋼鉄の剣、鋼鉄の盾

６３２８０Ｇｉｌｌ

〈アイナ・ローレル・シェルキナ〉

１５歳　　Ｌｖ４２

体力：２１
筋力：１７
魔力：１５４
精神：１０９
敏捷：３２
器用さ：３６
運：４１
ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：魔技【氷術型】【雷術型】【炎術型】、魔技上昇、氷魔術上昇、詠唱短縮

職業：魔術師

装備：魔なるローブ、祝福を受けた杖

５７２１０Ｇｉｌｌ

〈ラルゴ・バサンダ〉

１５歳　　Ｌｖ４１

体力：６４
筋力：６４
魔力：２０
精神：２０
敏捷：１２４
器用さ：７６
運：３２

ＳＰ残量〈０〉

称号：ラナバスタ王都学園卒業生

スキル：拳技【連撃型】、脚技【連撃型】、拳技上昇、脚技上昇

職業：拳闘士

装備：灰狼の革鎧、灰狼の鉄爪

６６９３０Ｇｉｌｌ

「へぇ～、凄いな……。じゃ次は俺のを」

そう言って俺は皆にステータスカードを渡す。

〈クロキ・シラカワ〉

１７歳　　Ｌｖ３２

体力：１０７
筋力：１０７
魔力：４１
精神：４１
敏捷：２４９
器用さ：８１
運：８１

ＳＰ残量〈１１０〉

称号：魔剣との契約者

スキル：魔剣技【速連撃型】、魔剣技上昇、瞬間加速、加速上昇

職業：魔剣士

装備：黒色のレザーコート

５０７８００Ｇｉｌｌ

「ええ！？」

「なんですの！？　これ！！」

「なっ……！」

「はぁ！？」

「あれ？」

ちなみに最後の素っ頓狂な声は俺。

１４話（後書き）

どうでしたでしょうか？

やっと念願のユーリ達のステータスが出せました。
ホント自分の文才のなさに呆れます（苦笑）

余談ですがユーリ達のステータスは、
他の一般的な冒険者たちのステータスに比べると、
微妙に偏りがちになっています。

もし良かったら感想お願いします。

15話

「な、なんですか！？　これ！？」

ユーリが固まってる三人を代表して声を上げた。

「いや、俺としても少しわからないところがあるんだ。ちょっと待ってくれ」

「え？　あ、はい」

不意を突かれたようで、素直に口を閉じるユーリ。

俺はその隙に頭の中で冒険者のサポート機能に、変化しているスキルと増えているスキルについて検索を掛けてみる。すると、こう出てきた。

魔剣技【速連撃型】…魔剣を扱うために最適なスキル。速さと手数を誇る型。剣技【速撃型】又は【連撃型】から派生する。

魔剣技上昇…魔剣を使った技（スキル）の威力が上昇する。

加速上昇…瞬間加速を使用するときの加速時間、加速倍率が上昇する。この加速時間と加速倍率はＬｖに依存する。

とのことだった。

余りの性能に驚いていた時、一つ気になったことがあったので、魔剣技【速連撃型】の項目に触れて、ホロウィンドウを出してみる。

すると、出てきた技欄（スキル）にはこれまでの【速撃型】の技（スキル）に加えて、最上位剣技　……は一つも無いものの、【連撃型】の上位剣技までが習得されていた。

正直、なんのチートだこれ……　と思った。

〈フルガイア・オンライン〉には“魔剣技”何てスキルも“速連撃型”何てスキルも無かった。そもそも魔剣なんて存在していなかったし、型については二つが合わさったものなんて見たことも聞いたことも無い（型の重複はあるようだが）。

「あのー、そろそろ良いですか？」

そこで痺れを切らしたユーリが俺の顔を覗き込みながら聞いてきた。

さすがにあんなに時間を開けると少しは冷静になるらしい。これと言って興奮した様子はない。

「ああ、何でも聞いてくれ。俺に答えられるものなら答える」

「それじゃあまず、何でＳＰが１１０もあるんですか？」

「ああ、それか。それなら最初からだ」

「最初から！？」

「最初からってどういうことですの！？」

「どういう事も何も、最初から１００はあったんだ。それ以外は何もわからん」

ここで、「本当は５００あった」何て迂闊に口を滑らそうものなら、もっと凄い質問攻めになっていたことだろう。なんせ、１００あるだけでこれなのだから。

「それでこのデタラメなステータスは何なんだ？」

「そうですよ。なんで僕たちよりＬｖが１０近く下なのに、こんなにステータスがあるんですか？　敏捷に至っては２００を超えてますし……」

「これはだな、Ｌｖが上がるごとに凄い速さでステータスが伸びていったんだ。正直俺もビビった。　……そういえば２００ってどの位なんだ？」

「どの位って……、少なくとも中級の冒険者ではありえない数字ですね。上級の熟練辺り位でしょうか」

「でも、やっぱデタラメだぜ。他のステータスも、魔法関係を除いては異常だ。中級の冒険者には確実に無理だ」

「そうなのか……」

この話を聞く限りは、俺のステータスは軽々しく見せない方がいいのかもしれない。ここでパーティーに参加したのも迂闊だったかもな……

「他にはないよな？」

「ま、まあ他のところも凄いですけど、知ってはいるものもありますし……」

「そうですわね」

「そうですね」

「そうだな」

「おしっ、じゃあこの話はこれで終わりだ。俺は早く宿に行って休みたいから……ユーリ、案内よろしく」

「え？　あ、そうでした。では、いきましょうか」

意外とすぐ引いてくれたので、チャンス！　と言わんばかりに俺は早口でユーリに宿屋への案内を頼んだ。

「よし。フィレスー、行くぞー」

「はい、マスター」

「あ、そうですわ！　明日はタンタラの森の入り口に九時集合ですわよ！　覚えておいてくださいましてね！」

アイナのその言葉を背中に受けながら軽く返事をし、ユーリの案内の元フィレスとともに決闘場を後にした。

「ほー、ここがユーリの家がやってる宿屋か。なかなか綺麗でよさ

そうな所だな」

「中はもっといい所ですよ？」

俺は今ユーリの家がやってる宿屋の前に来ている。

外見は、白を基調としたつくりの四階建てだ。『宿』と言うより『ホテル』といった印象の方が少し強いかもしれない。だが、その中にも家庭的な感じのする、不思議な所だった。

俺に宿の事を褒められたのが嬉しいのか、ユーリはその可憐な顔に笑みを浮かべながら上機嫌で中へと俺たちを案内してくれた。

「お母さん、ただいま」

「あら、ユーリお帰りなさい。あれ？　あなたが男の人連れてくるなんて珍しいじゃない。もしかしてその男の人……彼氏！？」

その言葉を聞いた宿屋の中にある食堂に座っていた男たちが一斉に驚愕の声を上げた。

「な、なに！？　ユーリちゃんに彼氏だと！？」

「あの野郎ぅ……俺たちのアイドルに手を出しやがったのか！？」

「嘘だろぉ～嘘だと言ってくれぇ～」

その声を聞いてか聞かずか、ユーリは否定の声を上げた。

「ち、違うよお母さん！　この人はお客さん！」

「あら、そうなの。つまらないわねぇ……」
すると今度は食堂の方からこんな声が聞こえてきた。
「それもそうか、あのアインスやラルゴでも無理なんだからな」
「やっぱり俺たちのアイドルはなびかない！！」
「よかったぁ～よかったよぉ～」
あの様子から察するにユーリはアイドル的な存在らしい。ユーリ目当てでこの宿に泊まっている男も多そうだ。
「『クライノ亭』にようこそ。私はこの宿の女将をやっているサラです。覚えておいてくださいね」
「俺は冒険者のクロキ、こっちはフィレスです」
ユーリと同じ艶やかな黒髪を結っている色っぽい姿のサラさんに、軽く自己紹介する。
サラさんは男の目を惹く、メリハリのはっきりとした体つきをしている。ユーリはきっとこれを受け継いだのだろう。

そのあと、サラさんに一ヶ月分のお代（６００Ｇｉｌｌ）を払って、ユーリに部屋まで案内してもらった。
今は部屋のベットに寝転がっている。なかなか綺麗かつ広い部屋だった。
「ああー、疲れた……。なんか今日のだけで色々ありすぎたな……」

「大丈夫ですか、マスター？」

「いいや、もう駄目だ。俺は寝る。絶対に寝る。おやすみ」

「ふふっ。そうでしたか、おやすみなさい。マスター」

楽しそうなフィレスの声を聞きながら俺は、襲ってくる眠気に逆らわずそのまま身を委ね、意識を闇に沈めた。

15話（後書き）

どうでしたでしょうか？
もし良かったら感想お願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2173u/

黒き英雄

2011年9月1日21時15分発行